PROGRAM

10月19日(木)

10:00 市民健康フェスタ（会場ロビーにて14:00まで）
12:30 受付
13:30 開会式
13:50 記念講演「いのちへの回帰~地球に生かされる私たち~」
野中ともよ(NPO法人ガイア・イニシアティブ代表)
15:20 第一部 日本温泉首長サミット会議
コーディネーター　合田 純人(NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事)
パネラー　全国温泉地自治体首長
倉吉市(鳥取県)、阿賀野市(新潟県)、菊池市(熊本県)
北杜市(山梨県)、豊富町（北海道）
16:00 第二部 市民フォーラム「地域とともにいきる温泉ー健康づくり、ひとづくり、まちづくり」
コーディネーター　原田啓一郎(駒澤大学法学部教授)
パネラー　近田敬子(鳥取看護大学学長)
森貞福恵(関金ラジュームデイサービスセンター施設長)
芦田倍芳(関金温泉旅館組合事務局長)
福井真喜代（湯中運動ひとはな会副会長）
竹中啓子（倉吉市保健センター所長）
17:30 全国有名温泉地宿泊券他抽選会
18:30 交流レセプション(グリーンスコーレせきがね)

10月20日(金)

6:00 朝湯会(関の湯他) 温泉街等散策
9:00 地域連携フォーラム(於:グリーンスコーレせきがね会議室)
「地域とともにいきる温泉ー健康づくり、ひとづくり、まちづくり」
コーディネーター　合田 純人(NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事)
パネラー　山本麻衣(環境省自然環境局温泉地保護利用推進室長)
大森寛子(熊本県菊池市健康推進課総務審議員)
斎藤真由美(北海道豊富町町営温泉施設ふれあいセンター保健師)
坂本信江 (大分県竹田市保険健康課参事)
11:00　総括講演「温泉とともにいきる地域、地域とともにいきる温泉を目指して」
坂本 誠(NPO法人ローカル・グランドデザイン理事、農学博士)
11:45　閉会

関連催事：「第6回日本の名湯百選©シンポジウム」岡山県奥津温泉

10月20日（金）　12:15 専用車で移動
14:15 人形峠環境技術センター視察（日本原子力研究開発機構バックエンド研究開発部門）
16:30　奥津温泉体験入浴　18:30　交流夕食会
10月21日（土）　6:00 朝湯会
8:45　第6回日本の名湯百選シンポジウム「温泉地活性化の取り組みと連携」
11:30 閉会/移動(専用バス)途中昼食休憩
13:00 湯原温泉着 砂湯(露天風呂)湯巡り
14:30 移動 (16:00)岡山空港 経由 (16:30) 岡山駅送迎(送迎専用バス)

特定非営利活動法人 健康と温泉フォーラム

NPO 法人健康と温泉フォーラムは、医療・環境・施設等、温泉保養地に関わるあらゆる専門家によって 1986 年に設立された非営利団体です。その活動は、温泉の健康利用促進の啓蒙・普及活動はもとより、心身ともに健康で幸福な生活（Well-being）をおくるための温泉保養地づくりに必要な「環境・施設・プログラムづくり」に関する様々な国内外の情報の提供や政策提言等を通じて健康で活力ある社会の構築に貢献する事を目的として活動しています。

The Forum on Thermalism in Japan

健康と温泉フォーラム2017 in倉吉市

地域とともにいきる温泉ー
健康づくり、ひとづくり、まちづくり

関金温泉開湯 1300 年記念事業
源泉回帰

2017年10月19日(木)、10月20日(金)
倉吉市関金都市交流センター

関連催事：ラジウム・ラドン温泉広域連携会議
第６回日本の名湯百選© シンポジウム

健康と温泉フォーラム2017in倉吉市実行委員会
特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム

CONTENTS

1.主催者挨拶　三友 紀男　(NPO法人健康と温泉フォーラム会長)..... 1

2.歓迎挨拶　平井 伸治(鳥取県知事)

3.後援者挨拶「温泉新時代への期待」 2
牧野 直樹(一般社団法人日本温泉気候物理医学会理事長)
栗原 茂夫(一般財団法人日本健康開発財団理事長)
岡田 友悟(NPO法人 日本スパ振興協会理事長)

4.記念講演　**「いのちへの回帰〜地球に生かされる私たち〜」** 4
野中 ともよ(NPO法人ガイア・イニシアティブ代表)

5.第一部「日本温泉首長サミット会議」 5
コーディネーター　合田 純人(NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事)
プレゼンテーター　石田 耕太郎(鳥取県倉吉市長)
田中 清善(新潟県阿賀野市長)
渡辺 英子(山梨県北杜市長)
江頭 実(熊本県菊池市長)
工藤 栄光(北海道豊富町長)

6.第二部 市民フォーラム「地域とともにいきる温泉ー健康づくり、ひとづくり、まちづくり」
コーディネーター　原田 啓一郎(駒澤大学法学部教授) 10
プレゼンテーター　近田 敬子(鳥取看護大学学長)
森貞 福恵(関金ラジュームデイサービスセンター施設長)
芦田 倍芳(関金温泉旅館組合事務局長)
福井 真喜代(湯中運動ひとはな会副会長)
竹中 啓子(倉吉市保健センター所長)

7.第三部 地域連携フォーラム 21
コーディネーター　合田 純人(NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事)
プレゼンテーター　山本 麻衣(環境省自然環境局温泉地保護利用推進室長)
大森 寛子(熊本県菊池市健康推進課総務審議員)
斎藤 真由美(北海道豊富町町営温泉施設ふれあいセンター保健師)
坂本 信江 (大分県竹田市保険健康課参事)

8.総括講演「温泉とともにいきる地域、地域とともにいきる温泉を目指して」.....28
坂本 誠 (NPO法人ローカル・グランドテザイン理事 農学博士)

9.特別寄稿「歴史ある温泉」の再生を考えるー温泉発見・開発伝説の活用ー
前田 勇 (立教大学名誉教授) 29

【後援】環境省、厚生労働省、観光庁、全国市長会、全国町村会、鳥取県、地域活性学会、(一財)日本健康開発財団,(一社)日本温泉気候物理医学会、温泉療法医会,NPO法人日本スパ振興協会、NPO法人ガイア・イニシアティブ、(公社)鳥取県中部医師会, (公財)とっとり県民活動活性化センター、新日本海新聞社、NHK鳥取放送局、朝日新聞鳥取総局、産経新聞鳥取支局、毎日新聞鳥取支局、テレビ朝日鳥取支局、山陰中央新報社、時事通信社鳥取支局、BSS山陰放送、共同通信社鳥取支局、日本海テレビ、日本海ケーブルネットワーク、TSK山陰中央テレビ

三友　紀男
みとも　としお

NPO法人
健康と温泉フォーラム会長
ラジウム・ラドン温泉を利用した
健康日本推進連絡会議委員長
仙台社会保険病院名誉院長

主催者挨拶

昨年秋、瑞牆山や八ヶ岳など日本百名山の増冨温泉での開催に続き、本年は霊峰伯耆大山麓の出湯(いでゆ)関金温泉で健康と温泉フォーラム2017in倉吉市を温泉開湯1300年の記念事業の一つとして地元実行委員会と共催いたします。昨年と同様に、ラジウム・ラドン温泉広域連携会議の温泉地に加え、温泉を健康づくりに積極的に活用されています、日本の名湯百選の認定温泉地の多くの関係者のご参加をいただき、本日から2日間にわたって地域と温泉のあるべき姿を求め、熱い論議を展開する予定です。振り返れば、温泉療養の社会的活用をより促進するため、温泉利用型健康増進施設の認可条件緩和を、厚生労働大臣に関係自治体首長と一緒に陳情したのが2年前の6月でした。その条件緩和が実現し、本年7月に北海道豊富町と大分県竹田市が初めて連携型の施設群として温泉療養の医療費控除を厚労大臣より認定を受けることができました。ご支援いただきました多くの関係者の皆様に改めて御礼申しあげます。今後、国民にこの制度の認知を促進し温泉療養のさらなる発展を期待いた します。

そして、フォーラムは、まもなく75回目となる月例研究会などを通して、官民一体となったプラットフォームを継続的に運営し、より深く、広く、高い目標を掲げ、踏み込んだ論議をし、温泉利活用の推進、療養・保養の交流人口の増大、インバウンドとして高い人気を誇る温泉のグローバリゼーションへの対応、など具体的な活動を継続してまいります。
テーマである「地域とともにいきる温泉ー健康づくり、ひとづくり、まちづくり」のフォーラムを介護福祉事業に温泉活用を積極的に進めている倉吉市で開催する意義は非常に大きいものだと確信しています。

ご挨拶の最後になりましたが、本フォーラムの開催にあたり、ラジウム・ラドン温泉広域連携温泉地関係者、日本の名湯百選©関係者そして、特に開催地であります鳥取県倉吉市や関金温泉旅館組合など地元から多大なご尽力を賜りました。関係各位に深く敬意を表しまして主催者のご挨拶といたします。

平井 伸治
ひらい　しんじ
鳥取県知事

昭和36年生
昭和59年 3月 東京大学法学部卒業
　　4月 自治省入省
平成11年 7月 鳥取県総務部長
平成13年 6月 同副知事
平成19年 2月 総務省退職
　　4月 鳥取県知事選挙初当選
　　鳥取県知事就任
平成27年 4月 鳥取県知事選挙再選
　　（３期目）

歓迎挨拶

「健康と温泉フォーラム２０１７ in 倉吉市」が開催されますことを心からお祝い申し上げますとともに、全国各地からお越しいただきました皆様を心から歓迎いたします。

鳥取県では、昨年１０月２１日に当地を震源とする震度６弱の鳥取県中部地震が発生し、住家・公共施設の損壊や特産の梨の落果など、多くの被害を受けました。
これまで全国の皆様からあたたかいお言葉や御支援をいただきましたことに心から御礼と感謝を申し上げます。
現在は、地震前に戻す復興にとどまらず、地震前よりも元気で賑わう地域となるよう、福を興す「福興」に取り組んでおりますので、変わらぬ応援をお願いいたします。

さて、本県は、鳥取砂丘をはじめとする様々な地形や地質を有する山陰海岸ジオパーク、中国地方最高峰の大山など、多様な自然に恵まれた県であります。ここ鳥取県中部では、日本遺産の三徳山をはじめ、倉吉市の白壁土蔵群に代表されるレトロな町並みや名探偵コナンのまちなど、歴史文化やポップカルチャーも楽しんでいただけます。

また、本フォーラムの開催地・関金温泉は、中国地方随一の温泉県である鳥取県の中でも他に類を見ない湯の美しさから「白金の湯」と呼ばれ、平成２３年に「日本の名湯百選」に選定され「ラジウム・ラドン温泉」として健康づくりへの活用が進められています。
関金温泉は、養老年間から数え今年で開湯１３００年を迎えました。これを記念して、今年は本フォーラムをはじめ、御幸行列など磨き上げられた伝統文化行事や、来年開山１３００年を迎える大山へのトレッキングなどのイベントが展開されています。

本フォーラムにおいて、観光から健康づくり、介護・福祉まで幅広く温泉の活性化について研究を深められることを願ってやみません。

結びに、本フォーラム開催に多大な御尽力を賜りました関係者の皆様に心から敬意を表しますとともに、御列席の皆様の御健勝、御多幸をお祈り申し上げます。どうぞ秋の装い深まりゆく鳥取県の温泉と食と人情をお楽しみください。

後援者挨拶「温泉新時代への期待」

牧野 直樹

まきの　なおき

一般社団法人
日本温泉気候物理医学会理事長

昭和49年 京都府立医科大学卒業
九州大学医学部循環器内科入局
平成16年 九州大学
別府先進医療センター長
平成21年 九州大学病院
別府病院院長
平成25年 九州大学名誉教授
平成29年 現職

健康と温泉フォーラム 2017in 倉吉市「地域とともにともいきる一健康づくり、ひとづくり、まちづくり」が開催されますことを心よりお祝い申し上げ、一言ご挨拶を申し上げます。

日本温泉気候物理医学会は昭和 10 年に設立され、今年で 82 周年を迎えます。本学会は温泉療法、気候医学、物理療法を通じ国民の疾病治療・予防および健康保持・増進を目指しております。現在の会員数約 2000（医師数 1600）名、温泉療法医 1000 名であります。現在、我が国では高齢化が急速に進み介護と医療の連携が大きな役割を果たすべき時代となっています。日本温泉気候物理医学会は従来からの温泉・気候・物理療法を中心とした非薬物療法は高齢社会においてその役割は大きくなると思われます。また、これらの治療は増加する医療費や介護費の抑制にも期待されます。現在、全国の温泉地では地域社会の疲弊や健康に対する社会的関心の高まりの中で、温泉資源の新たな活用に向けた様々な試みが行われています。当倉吉市の関金温泉はラジウム泉・ラドン泉が有名であり、昭和 45 年に国民保養温泉地に指定されています。これらの放射能泉は大量使用すると有害であるが、少量の場合は、逆に体によい刺激を与えて、免疫機能を高め、関節リウマチ、変形性関節症、筋肉痛、神経痛などでの鎮痛効果があるとされています。この関金温泉は今年で 1300 年となり歴史ある温泉であり、今回のフォーラムが記念事業と伺っています。

日本は世界有数の長寿国ですが、その要因の一つとして入浴による温浴習慣も言われています。湯船に体ごと漬かる温浴により、熱ショックタンパクが増え、老化予防につながることが明らかになりつつあります。人は生きていく上で、老化を避けられませんが、誰もがいつまでも若々しく、健康な状態で歳を重ねたいと願っています。温泉気候物理医学会として放射能泉の効果には更なる科学的エビデンスを構築する必要があると考えています。このように本医学会は疾病の病態解明のみならず国民の健康保持・増進のために鋭意努力して行きたいと思っています。健康には栄養・運動・休養・仕事のバランスが良く保たれていることが必要とされています。私は自然からの贈り物である温泉をもっと大事に有効利用できれば健康寿命は伸びると考えます。日常からのストレス解消のため休養としての温泉に浸り、もっとリラックスしてはいかがでしょう。

健康と温泉フォーラム 2017in 倉吉市の目的である「地域とともにいきる一健康づくり、ひとづくり、まちづくり」は大変意義あることであり、全国の温泉地を持つ市町村に発信しより広域な温泉連携による地域活性化を期待するものであります。

最後になりましたが、本フォーラム開催にご尽力賜りました開催実行委員会並びに関係各位の皆様に敬意を申し上げ挨拶にしたいと思います。

後援者挨拶「温泉新時代への期待」

栗原 茂夫

くりはら　しげお

一般財団法人
日本健康開発財団理事長

温泉利用指導者、温泉入浴指導員
1958年東京生まれ。筑波大学比較文化学類卒業。1980年日本交通公社（現ＪＴＢ）入社。宇都宮支店長、ＪＴＢ関東常務取締役を経て、2012年より現職。
特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム理事、特定非営利活動法人日本ヘルスツーリズム振興機構理事、公益財団法人日本交通公社監事、公益財団法人日本修学旅行協会監事等を兼職

我が国の高齢化は極めて急速に進み、社会・経済情勢の変動等と相まって、国民生活に広く影響を及ぼしております。本格的な高齢化社会の到来を目前に控え、健康に対する社会的関心が益々高まりつつある中で、今年度国の新たな成長戦略「未来投資戦略 2017」が閣議決定されました。そして 5 つの戦略的分野が指定され、その筆頭が「健康・医療・介護」です。その中で「健康寿命の延伸」を重点施策とし技術革新を最大限活用し、新たな健康・医療・介護システムを構築することで、世界に先駆けた生涯現役社会の実現を目指しています。

これに前後し、制度開始から四半世紀を迎えた厚生労働大臣認定「温泉利用型健康増進施設」は、近隣の別個の温泉及び運動施設が一体運営されていれば良いように認定規定の緩和が図られ、今年７月に北海道豊富町・大分県竹田市にて新制度第一期として認定されました。
環境省では、豊かな自然と温泉資源を活用した国民の健康増進、激増している訪日観光客の温泉地への誘導等による地域活性化を目指し設置された「温泉地保護利用推進室」が、温泉地活性化に向け現代のライフスタイルに合った温泉地の過ごし方を「新・湯治」として提案し、その施策である「新・湯治推進プラン」を推進しています。

経済産業省が運用を推進するヘルスツーリズム認証制度が今秋始まります。サービスを提供する体制整備（安全性）、参加者に健康への気付き（有効性）、地域特有のプログラムへの組込（価値創造性）を第三者機関が認証し、安心して利用することを狙いとします。日本健康開発財団は「温泉医科学研究所」にて、温泉・入浴等を活用した健康作りや保養システム等の研究・開発・普及を進め、健康増進・回復に貢献すべく活動しています。また今年度から㈱ＪＴＢより訪日外国人受診者・患者の受入・連携及びコンサルティング等を推進する「ジャパンメディカル＆ヘルスツーリズムセンター」及びヘルスツーリズムに関するコンサルティングを行う「ヘルスツーリズム研究所」を受入れ、温泉医科学研究所との融合を進めながら発展を目指しています。

人類の貴重な資源である温泉の正しい健康活用と地域の発展・活性化を推進することは、大変意義深く、大きな注目を集めています。高齢化が進む住民一人一人が、安心して生活を送れるよう、有機的なネットワークを構築し、新たな温泉の可能性を考えていけたら、こんなに素晴らしい事はないと思います。

後援者挨拶「温泉新時代への期待」

岡田 友悟

おかだ　ともあき

特定非営利活動法人
日本スパ振興協会理事長

1960年東京生まれ
化粧品関連の商社、温浴関連ビジネスに勤務、各種温浴施設・スパの立ち上げにかかわる。その後スパ振興協会の立ち上げに参加、スパの啓発活動に従事する。
現職　特定非営利活動法人
　日本スパ振興協会理事長
公益社団法人　日本サウナ・スパ協会　諮問委員
沖縄県エステティック・スパ協同組合　顧問
国立大学法人　琉球大学
非常勤講師

日本人は古来より水、温泉、海水を大切にし、身を清め、心と体、傷や疲れをいやしてきました。中でも温泉は江戸以降庶民にも湯治や娯楽に利用され、現在も様々な形で利用されています。しかし、バブル期に観光地化・歓楽地化によりにぎわった多くの温泉地はその反動でにぎわいを失い、顧客の旅館内への囲い込みにより温泉街としての魅力も失い、さみしい思いをしています。保養地にも娯楽は必要です。長期滞在を前提にすればなおさらです。温泉も娯楽もその地域ならではの街並みや景色、食事や名物、祭りや踊り、すべてを文化としてとらえ総合的に発信することが最も重要です。

温泉の利用だけであれば、都心でも温泉施設はたくさんありますし、大規模な施設では、スポーツジムや多種のマッサージや様々な食事、１日約 2000 人の利用客がある施設もあります。温泉地ならではのもの・ことを伝え、家庭での入浴、都心の温泉施設での入浴、温泉地での入浴、その各々の良さをつなげていくことも必要なのではないでしょうか？　都会のホテルでも温泉地の旅館と提携し相互利用を進めているところもあります。

一方、日本国内の人口減少と高齢化が言われる中、ロンドンビジネススクール教授のリンダ・グラットンは日本では 2007 年生まれの人は半数以上が 107 才まで生きると著書「ライフ・シフト」で述べています。100 年ライフを前提にすれば現在の定年年齢が 75 歳、80 歳ということもあり得ます。これにつれてライフスタイルが大きく変わることは間違いありません。健康寿命の延伸に、第二の職場として、そして家庭と職場以外の安息の場所として、温泉地の位置づけを考えることも必要でしょう。

最近は家庭でも若い方を中心にシャワーのみで済ませ、湯船につかる習慣が薄れてきています。温泉のみならず入浴の重要性・効果をきちんと示すことが第一歩であり、そのうえで温泉ごとの効能、転地療法の重要性、ストレスの発散方法をきちんと伝えて温泉地の利用につなげていくべきだと思いますし、銭湯がなくなってくる中、これからの人達に入浴を教えていくことも長いスパンで行っていく必要もあると思われます。

今、外国人旅行客も増え、日本の温泉体験を求める人も増えています。海外でも日本型温浴施設が増えていて、温泉システムの輸出がビジネスになる時代です。この魅力ある温泉が実は日本人には身近すぎてその良さに気が付かなかったり、忘れたりしています。温泉の持つ力、魅力を伝えることで温泉地が安息地であり第二のふるさと、繰り返し訪れる場となること。日本の ONSEN が温泉地が再活性することを期待しています。

記念講演

「いのちへの回帰~地球にいかされる私たち~」

野中 ともよ

のなか　ともよ

特定非営利活動法人
ガイア・イニシアティブ代表

NHK「海外ウィークリー」「サンデースポーツスペシャル」等、テレビ東京「ワールド・ビジネス・サテライト」等、数々の番組でメインキャスターを務めた後、日興フィナンシャル・インテリジェンス理事長、アサヒビール、住友商事、三井不動産、三洋電機ほか数社で社外取締役として経営に関わる。2005年～2007年三洋電機代表取締役会長。また、1990年代より政府審議会委員を歴任。財政制度審議会、法制審議会、中央教育審議会ほか多数。現在は、2007年8月に立ちあげたNPO法人ガイア・イニシアティブ代表として地球環境・エネルギー問題と地域活性化に取り組む。East West Center（ハワイ大学）客員教授。"Club of Rome"（ローマクラブ）公式メンバー。国境なき医師団フィランソロピック・アドバイザー、「科学技術イノベーション政策研究の方向性に関する有識者懇談会」/文部科学省 委員。

主な著書　『手ごたえのある女の人生が始まる本』(三笠書房)2005年
『心をつなぐ生き方』(サンマーク出版)2004年『ガンバレ、自分!』(三笠書房)1996年
『私たち「地球人」』(集英社)1992年

ファシリテーション

コーディネーター

■日本温泉首長サミット会議　10月19日
■地域連携フォーラム「地域とともにいきる温泉ー健康づくり、ひとづくり、まちづくり」　10月20日

合田 純人

ごうだ　すみと

特定非営利活動法人
健康と温泉フォーラム
常任理事

自然の脅威として地震、そしてその慈悲として温泉、その源は同じ母なる地球である。

今思えば、自然と共生が合言葉だった時代があった。人間のおごりは精神や心をものと同じように消費財として扱い、科学と称して数字や量がすべての根拠になり、人間の生命の構造や成り立ちまで解明できると信じられた。しかし、人間はそもそも自然でできていて、共生という対立軸ではなく自然と一体とかんがえれば、毅然と残るのは、生命という奇跡のような活動である。生命は体という複雑な構造体に支えられ、環境変化に順応し、自ら生きるための糧を自然から採集し、生きる為のエネルギーを得る。そしてその練造行為を終え、物質になるまで続ける。人間はその生命活動を自らの意志で制御できず自律した生命サイクルとして、物質社会から遊離した「こころ」と向き合っている。そのこころの源がどこにあって、どこからくるのか、脳の構造やシステムをいくら調べてもなかなかよくわからない。知能はつくれても心はつくれないのである。

この生命の源から湧き出て、私たちのこころと体を癒やし、寄り添い続けてくれる温泉、その温かさ、湯気の音色や匂い、そんな感触を媒体として遠い昔への旅を続けやっと、こころの源がどこからくるのか分かるかもしれない。そんなことを考えるきっかけに今回のフォーラムがなってくれればと願います。

1949年、香川県生まれ。1986年、健康と温泉フォーラムの設立メンバーとして又、世界保健機関（WHO）と公式関係を持つ国際温泉気候連合のアジア・太平洋協議会（FAPAC）の事務局長として、国内のみならずアジア・太平洋地区の温泉の社会的利用と保健利用の啓蒙・普及に永年携わった。海外各地での豊富な経験を活かし、イラン政府やペルー政府などの温泉調査・研究、温泉開発プロジェクトに関わり、健康と温泉のグローバル化を進めている。国内では、自治体や団体のアドバイザー・委員を歴任。専門は健康社会学。

主な著書　「新・湯治のすすめ」「放射能泉の安全に関するガイドブック」「日本の名湯百選」「温泉からの思考」「温泉実務必携」（共著）他

日本温泉首長サミット会議

石田 耕太郎

いしだ　こうたろう

鳥取県　倉吉市長

昭和 48 年３月 大阪市立大学法学部卒業
昭和 54 年 10 月 鳥取県職員
平成 12 年８月 境港管理組合事務局長
平成 14 年４月 福祉保健部長
平成 18 年４月 生活環境部長
平成 21 年４月 県営病院事業管理者
平成 22 年４月 倉吉市長

昨年の10月21日に発生した鳥取県中部地震に際しましては、全国の皆様から多大なご支援を賜り深く感謝申し上げます。本フォーラムでは、地域資源である温泉を単なる観光素材としてとらえるだけでなく、高齢化社会を迎えた時代背景に即した新たな温泉地の社会的な活用方法の提言を行うとともに、鳥取県中部の震災からの復興を、ここ関金温泉から発信していきたいと思います。

1　倉吉市の概要

倉吉市は、鳥取県中部に位置する人口約５万人の市です。“倉吉”の地名の由来は“暮らし良し”とも言われており、恵まれた自然環境と豊富な農産物を有し、人柄は穏やかで、長年培われた歴史・文化・芸術が今でも人々の生活に息づく山陰の中核都市です。

市内には国の重要伝統的建造物群保存地区として選定されている打吹玉川地区をはじめ、江戸時代末期から昭和初期までに建てられた家屋や土蔵が多く残り、その街並みは、往時の面影を残す懐かしい佇まいをみせています。

市の南部、中国地方の名峰大山の東山麓に位置する関金温泉は、養老年間（717年～724年）に鶴が怪我を癒すために入浴しているところを行基が発見し、弘法大使が再興したと伝えられています。700年代後半に伯耆国の国庁が倉吉市におかれたことから、湯治場として、また、山陰と山陽をつなぐ備中街道の要所にあることから宿場町として栄えてきました。お湯の見た目は無色透明で、その美しさから「白金（しろがね）の湯」とも呼ばれています。泉質は神経痛やリウマチなどによいとされる単純弱放射能泉で、湯治客や地元の方など多くの方に親しまれています。自然環境に恵まれ、泉質の療養的な効果が高いことから、国民保養温泉地（昭和45年）と日本の名湯百選（平成23年）に選ばれています。

2　関金温泉開湯1300年祭

今年、開湯1300年を迎えた関金温泉では、新たな温泉地づくりに向けて、「源泉回帰」をテーマに旅館組合、地域づくり団体、地域おこし協力隊員、住民、行政が一体となって開湯1300年祭事業を進めています。

テーマである「源泉回帰」には、関金の原点である源泉（＝温泉）に立ち返り、皆で未来の関金像を考えていこうという思いが込められています。

関金地区には脈々と受け継がれてきた温泉、歴史、伝統文化、豊かな自然などの地域資源が多くあります。まずはこれらの地域資源を再認識することからはじめ、観光、健康、文化、地域などの様々な視点からこれを磨き上げ、組み合わせることで、「関金ならでは」を感じることができる体験を作り上げてきました。

現在関金温泉周辺では、大山から三徳山にかけての国立公園のナショナルパーク化に向けた取り組みや、来年に控えた大山開山1300年祭など様々動きが見られます。東大山山麓に位置する関金温泉への集客も期待される中で、関金温泉開湯1300年祭の取り組みを１年の「祭」で終えるのではなく、新たな100年に向けてのスタートとしていきます。

3　介護・福祉分野での温泉利用

平成23年に「日本の名湯百選」への選定を契機に、「観光」「健康」「介護」を連携させ、地域住民に多く利用され親しまれる温泉地を目指す「プラチナ（白金）プロジェクト」がスタートしました。

まず「観光分野」として、東大山の豊かな自然環境を活かしたトレッキングやカヌーなどの自然体験や農家と連携した農業体験メニューを作り、家族やグループ旅行に対応した旅行メニューを造成する中で、自然環境を活かした温泉地として、滞在時間の延長やリピーターの確保、地元住民との交流を図っています。

「健康分野」では、温泉を利用した「湯中運動」を平成24年から展開しています。湯船に浸かりながら手足を動かし、全身の筋肉バランスを整えるこの取り組みは、自主運営組織「ひとはな会」を中心として継続的に実施され、腰痛や膝痛の緩和等に効果を上げています。現在では、健康増進の面だけでなく、参加者同士のコミュニケーションの場として、新たな居場所づくりにも繋がっています。

「介護分野」では、周辺介護施設と連携し、「介護付き温泉旅館利用」の取り組みを進めています。高齢化の進む現代においては、シニア世代がいつまでも自分らしく住み慣れた地域で生き生きと暮らしていける社会（地域）の確立が重要となっています。関金温泉では、介護が必要な人でも、家族とともに安心してくつろぐことができる環境を整え、諦めていた温泉旅行を通して、要介護者と家族とが楽しく過ごすことができる温泉地を目指しています。現在はまだ実証段階ですが、倉吉ならではのＱＯＬ（クオリティ・オブ・ライフ）向上に向けた取り組みに繋げていきます。

これらの分野での温泉利用を進めていくことで、市民をはじめとする近隣住民に対して温泉の健康増進利用を促進するとともに、対外的には短期～中期滞在しながら楽しく健康づくりをすることができる滞在型温泉地を目指していきます。

4　終わりに

現在、環境省では温泉地の様々な課題を踏まえ、今後の温泉地の役割を見直し、温泉地が「新・湯治」を提供する場としての新しい温泉地のあり方を「新・湯治推進プラン」として提唱されています。本フォーラムにおける事例発表や意見交換が、これからの新温泉時代の幕開けの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、開催にあたり多大なご尽力を賜りました、ラジウム・ラドン温泉広域連携温泉地関係者、日本の名湯百選関係者、国、鳥取県の皆様に厚く御礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

田中 清善

たなか　きよよし

新潟県 阿賀野市長

昭和２６年７月１９日生
昭和５５年３月早稲田大学理工学部卒業
昭和５５年４月新潟県庁入庁
平成２３年３月新潟県庁退職
平成２４年４月２５日阿賀野市長就任

「地域とともにいきる温泉―健康づくり、ひとづくり、まちづくり」をテーマに、「健康と温泉フォーラム2017 in 倉吉市」が、日本百名山である大山の東の麓に位置する風光明媚な鳥取県倉吉市において開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

１　阿賀野市の概要

本市は、新潟県の北東部に位置し、県都新潟市に隣接しています。平成16年4月に4町村が合併し、市の西側を流れる大河「阿賀野川」を由来として阿賀野市として誕生しました。東に標高千メートルほどの県立自然公園「五頭連峰」を背に、田園風景と自然豊かな景観が広がっています。

江戸時代には、幕府直轄の天領として代官所が、明治2年には越後府として水原県が置かれ、まさに新潟県政発祥の地でもあります。

五頭連峰は弘法大師が開山したと伝えられ、信仰の山であるとともに、多様な登山ルートがあり、子供から高齢者まで気軽に登山を楽しむことができ、毎年多くの登山者で賑わっています。また、山麓一帯は全国森林浴の森百選に指定され、自然散策やハイキング、キャンプなどのアウトドア施設も整備されています。

五頭連峰の麓には、開湯1200年を誇る新潟県最古の温泉地である出湯、今板、村杉の3つの温泉地からなる五頭温泉郷が静かな佇まいをみせ、多くの方から天然ラジウム温泉を楽しんでもらっています。この五頭温泉郷は、新潟県が実施する観光地満足度調査で3回連続総合満足度第1位に輝いています。

また、本市には日本で初めて白鳥の餌付けに成功した「瓢湖」があります。

瓢湖は、ラムサール条約の登録湿地でもあり、毎年、10月になると５千羽余りの白鳥が飛来し全国有数の白鳥の湖として知られ、3月中旬まで市内の至る所で、日常風景として白鳥を間近に観察することができます。一昨年11月27日には、過去最高の10,159羽が飛来し、30万人余りの観光客がおいでになりました。

本市の基幹産業は、稲作を中心とした農業となっています。阿賀野川や五頭連峰から流れ出る豊富な水と肥沃な大地で生産されるコシヒカリをはじめ、野菜や山菜、果物など環境保全型農業による安全で安心な農産物を生産しています。近年では、食用花である「エディブルフラワー」の生産も注目を集めています。また、新潟県酪農発祥の地でもあり、新鮮な生乳から製造されるヤスダヨーグルトは全国ブランドになっています。

農業以外では、米菓、地酒や地ビール、餅、味噌、醤油、豆腐、油揚げ、ハチミツなどの特産品も多数あり､｢食の宝庫」でもあるとともに、古くから瓦の生産が盛んで、「いぶし銀の安田瓦」として全国に流通しています。

２　地域資源の活用

全国的な問題でもある人口減少と少子高齢化に対する特効薬がない中で､当市においても高齢化率が30%となり､3人に1人が高齢者という時代を迎えました。少子高齢化の行きつく先は、地域社会の崩壊と地域経済の破綻､さらに要介護者の増加という大きな問題を抱えることになります。この状況にいかに歯止めをかけ､定住人口を増加させるかが大きな課題であると考えます。

課題解決のためには、交流人口を増やし市の魅力発信を行い、雇用の場の確保や住環境整備も大切なことであると考えますが市の置かれている状況や特性、持ち得る資源を活かすことも大切なことであると考えます。

本市における地域資源のひとつに、全国有数のラジウム含有量を誇る五頭温泉郷があります。昨年5月20日に全国93番目となる国民保養温泉地の指定を受けることができました。人は老いを避けることはできませんが、健康を維持することは可能です。この大地の恵みである温泉と健康をキーワードに考えた場合、安全安心な食材とのコラボや観光資源である瓢湖、五頭連峰とのコラボなど、地域が持ち得る資源の活用が可能であると考えます。

３　阿賀野市の取り組み

本市では、五頭連峰の縦走登山やウォーキングと温泉組み合わせた「五頭リンピック」の開催や、国民保養温泉地周回ハイキングと地産地消の食材、温泉を組み合わせた「WALK＆EAT五頭温泉郷～秘密の散歩道～」の開催など、健康づくりに必要な「食・運動・生きがい・医療(健診)」の４要素に、「温泉」を加えた５要素による事業を展開しております。

温泉という資源をいかに活用し、健康づくりに結びつけられるか、まだまだ知恵を絞らなければならないと考えております。

４　終わりに

市民の健康づくりには、温泉を欠くことができないものと考えております。

大地からの恵みであり、先祖から大切に守り続けられた温泉の意義を考えた場合、娯楽や歓楽などの金もうけの手段であってはならないと考えます。

温泉を中心に健康、癒しがもたらされ、コミュニティが形成され、やがてひとつの文化として発展を遂げることになります。

この度、ここ関金温泉を有する倉吉市で開催される本フォーラムにおいて、関係温泉地がラジウム・ラドン温泉を活用し、市民の健康づくり、ひとづくり、まちづくりに役立てるとともに、それをキーワードとして地域の活性化が図られるものと期待しております。

結びに、フォーラムの開催に多大な御尽力を賜りましたNPO法人健康と温泉フォーラム、鳥取県倉吉市並びに関係各位のご努力に敬意を申し上げ、御挨拶といたします。

渡辺 英子

わたなべ　えいこ

山梨県　北杜市長

昭和42年 日本体育女子短期大学卒業
昭和42年 山梨県教職員
平成15年 長坂町議会議員
平成16年 北杜市議会議員
平成24年 北杜市議会議長
平成28年 北杜市長

健康と温泉フォーラム2017in倉吉市が鳥取県倉吉市で開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

また、昨年の１０月に本市において開催をいただいた際には、遠路、多くの方に足を運んでいただき、ご協力いただきましたこと改めて、お礼申し上げます。

＜北杜市概要＞

北杜市は、山梨県の北西部に位置し、北は八ヶ岳連峰、東は瑞牆山、金峰山、茅ヶ岳、西は甲斐駒ヶ岳を代表する南アルプスと周囲を山々に囲まれています。秩父多摩甲斐国立公園、南アルプス国立公園、八ヶ岳中信高原国定公園、県立南アルプス巨摩自然公園を有し、特に南アルプス地域は、ユネスコエコパークに登録されるなど、全国有数の美しい自然環境に恵まれた地域です。

また、山岳景観に加え国蝶オオムラサキの生息数、ミネラルウォーター生産量、日照時間が日本一を誇るまさに「山・紫・水・明」の地です。このような豊かな自然が、都心から約2時間という至近な距離で楽しめることから、年間約４００万の観光客が訪れます。

北杜市の自然環境は、農業に最適な地としても注目を集めています。「安心・安全・日本の台所」として、日照時間、清らかな水、澄んだ空気などの豊かな自然を活かし、お米をはじめ、牛乳・チーズといった乳製品、レタスなどの高原野菜、そばや大根などのおいしい農畜産物を生み出しています。首都圏までのアクセスも良いことから、これまで企業型農業生産法人２４社が参入しており、また、梨北米こしひかりは、日本穀物検定協会の食味ランキングで５年連続特Ａ評価をいただきました。北杜市は高齢者率が３５パーセントと高いですが、介護保険料基準月額は県内で最も低いことから、日常的に頂くことができる農産物、心に癒しをくれる自然景観、これらすべてが「健康」に始まり「幸せ」につながるもの（健幸北杜）と考えております。

＜ふるさと創生にむけて＞

こうした中、NPO法人ふるさと回帰支援センターが発表した２０１６年の移住希望地域ランキングで山梨県が１位となり、その中でも移住希望者が多い本市が注目を集めています。この機をとらえ、「住んでよし」「訪れてよし」「働いてよし」を実現し、北杜市の魅力を高め定住人口を図るなど、地方創生を強化しているところであります。

取り組みのひとつに「世界に誇る「水の山」プロジェクト」があります。北杜市は全国でも唯一、名水百選が３ヶ所あります。この清らかな水資源が、人々を心身ともに健康にするといった価値と魅力を国内外に広めながら、地域そのもののブランド化と活性化を、地元企業、市民とともに図っています。

また、恵まれた自然環境に‘働きやすさ’を加えることで、さらに北杜市の魅力を高めることができると考えています。市内には、世界に誇れる技術を持った製造企業や、飲料・食品メーカーも多く、最近では、企業型農業生産法人の進出が増えており、“世界に誇れる企業”と“働く人”を支援するため、『北杜市雇用創造協議会』を設立し若者や女性だけでなく、シニア世代まで、多様な人材が活躍できるまちづくりを推進しています。

＜増富地区について＞

増富ラジウム温泉峡は、秩父多摩甲斐国立公園の瑞牆山と金峰山の麓にあって、信玄公の隠し湯として約４５０年の歴史を誇り、全国有数のラジウム含有量を持つことから古くから湯治客に親しまれてきました。また、平成の名水百にも選ばれた「金峰山・瑞牆山源流」の本谷川を代表とする渓谷美や、大小様々な岩が切り立つ瑞牆山の独特な景観、さらには今尚残る昔ながらの里山風景が、訪れた方の心を癒してくれます。このような自然環境を活かし、温泉療法だけでなく、自然療法、食事療法、運動療法と組み合わせた総合的な療養ができる新しい温泉地づくりを進めています。

また、市では、南アルプスユネスコエコパークに続き、秩父多摩甲斐国立公園を中心とした地域のユネスコエコパークの登録を目指しており、県や関係市町村と連携を図り、登録に向けた啓発活動、トイレの改修工事や案内看板の充実など、自然に配慮した環境整備を行っているところであります。増富地域は、北杜市内でも特に高齢化率が高いエリアでありますが、脈々と受け継がれてきた文化、風習、知恵が根付いている地域でもあります。鹿肉や花豆、大根などの地のものを活用した特産品づくり、県内外の大学と連携した田舎体験プログラムの開発など、自然環境の保全と調和した持続可能な地域社会のモデルとなるべく、取り組みが進められています。

＜終わりに＞

温泉は、国民にとって休養、保養の重要な存在です。本フォーラムは幅広い知見が集まることから、温泉が有する魅力や誘客力を高め、ふるさと創生につながるものと期待しております。

結びに、健康と温泉フォーラム2017in倉吉市の開催にあたって、多大なご尽力を賜りましたＮＰＯ法人健康と温泉フォーラム、倉吉市の関係各位に感謝申し上げるとともに、みなさまのふるさとの発展を祈念しましてご挨拶といたします。

江頭　実

えがしら　みのる

熊本県　菊池市長

昭和 47 年 菊池高校卒業
昭和 51 年 九州大学経済学部卒業
昭和 51 年 富士銀行（現みずほ銀行）入社
ドイツ・ニューヨーク・ロンドン・スイス
など主に海外部門に従事
スイス富士銀行社長・ロンドン支店長を歴任
平成 21 年 ソフトバンクに入社
平成 25 年 菊池市長に当選

「健康と温泉フォーラム2017in倉吉市」、並びに「日本温泉首長サミット」が鳥取県倉吉市で開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

菊池市は、熊本県北東部に位置し、阿蘇外輪山などの山々から流れ出る豊富な水が菊池平野を潤し、肥沃な大地を形成しています。

西日本一の渓谷美を誇る菊池渓谷は、「日本の名水百選」などに選ばれ、春の新緑・夏の清涼・秋の紅葉・冬の雪景色など、四季を通して人々の心を和ませています。

菊池市は、市名に名を残す菊池一族の統治により、九州の政治・文化の中心地として栄え、九州の政治・教育・文化の面において、大きな影響を与えていました。現在でも多くの遺跡が各地に残っています。

菊池温泉は、昭和29年に町なかで湧出し、平成23年10月に「日本の名湯１００選」の認定を受けました。現在、約１０軒の宿があり、それぞれの宿が泉源を持つほど湯量が豊富で、４５℃の温度を保った天然の温泉は、無味・無臭・無色透明のアルカリ性で、肌に優しく柔らかい泉質は、美容・神経痛・リウマチなどに効能があると言われ、別名「美肌の湯」「化粧の湯」と呼ばれ、肌ざわりがよく、女性をはじめ多くの観光客に親しまれています。温泉の湧出は、掘削を主導された商工会長が夢の中で見たという「白龍」に起源を発し、夏まつりでは長さ50m、重さ400kgにもなる巨大な雄龍・雌龍が商店街を勢いをつけて蛇行演舞する姿は圧巻です。昨年１月に、東京の浅草（まるごとにっぽん）で演舞したことをきっかけに、８月には横浜の日産スタジアムで行われた「ももいろクローバーｚ」のライブで２日間演舞し、来年１月には、東京ドームで行われるふるさとまつり東京で演舞することが決定しています。

私は、「健康」をテーマに据え、キャッチフレーズを『癒しの里　菊池』として、心と身体、命の洗濯に年に幾度も行きたくなる癒しの里の実現を目指しています。地域の食や自然を活かし、お客さまと息の長いお付き合いをしていきたいと考えているからです。

本市は、平成13年度より温水プールや温泉を活用した健康づくりを行政主導で進め、効果検証の結果を市民に周知しながら事業の推進を図り、健康づくりの支援体制の整備と併せて、グループや団体の組織をつくり、自助による市民主体の活動へと移行してきました。

そこで、更に温泉を活かした「予防医学」と「長期滞在型観光」の振興も視野に、市内外にもっと菊池温泉の良さを知っていただこうと、昨年、地方創生加速化交付金の採択を受け、「健康づくりプログラムの実施、効果検証を行う事業」に取り組み、温泉療法専門医、温泉利用指導者、自然セラピスト、中国･漢方医学専門医などの各分野の専門家から、意見やアドバイスを頂戴しながら12回の教室を開催しました。

地産の旬の食材を活かした600Kcalの昼食、健康講話、湯中運動、湯上り体操、歴史散策をしながらのウォーキングなどを行い、菊池養生園（広域保健センター）で血液検査等の評価を実施しました。課題も見えてきましたが、受講者の検査データから改善効果が見られ、ストレステストでも軽減効果が認められました。短期間であったため、継続的な行動変容や環境への効果は十分に得られませんでしたが、今後継続してできるプログラムを考えながら、「平成の養生」を目指し、市民の健康管理を図っていきたいと考えています。

また同時に、さまざまな角度や切り口で菊池市を見つめ直し、菊池市が持っている潜在的な魅力を商品化して発信していくことも重要だと考えています。

自然を活かし、健康を基軸として、農業や観光を発展させ、これらをつなげていく、次に都会と地方、子どもと老人をつないでいく、これが私たちが目指している『菊池モデル』です。こうすることで、菊池を舞台に新たな化学反応が起き、海外の人にとっての日本のように、日本にとっての菊池になれると思っています。

最後になりましたが、本サミットの開催にあたり、ご尽力賜りました健康と温泉フォーラムをはじめ、開催実行委員会、関係者各位に敬意を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

工藤 栄光

くどう　えいみつ

北海道　豊富町長

昭和24年　豊富町生まれ
陸上自衛隊２特連スキー競技
特別戦技訓練隊パイアスロン
隊員を経て
昭和47年豊富町役場入り
平成11年助役就任
平成15年町長
現在4期目

１．超田舎町の財産

「町長、本当にありがとうございました。私、本当に豊富温泉のおかげで人生を取り戻すことができました。」

数年前の豊富温泉に関するフォーラムの会場で、一人の若く美しい女性が急に私の前に立ち、私の手を握り頂いた言葉でした。この女性は子供の頃からのアトピーが学生になってから悪化し、一時は外出もまったく出来ないぐらい重症化し、本当に自殺さえ考える毎日を送っていた際に豊富温泉の噂を聞き、藁をもすがる思いで湯治に来たところ奇跡のように症状が良くなり、今ではまったく普通の生活を送れるようになったこと、諦めていた仕事や恋愛も今では躊躇無く出来ること等を私に堰を切ったように次々に話し始めました。私自身から見てもまったく普通な生活を送っていたと思われる娘さんが、死を考えるようなアトピーの苦労をしてきたこと、そして温泉が本当にこのような奇跡を起こすことが信じられない気持ちで、嬉しさの中に温泉の力がこんなに凄いのか？と、逆にとまどいを感じたことが昨日のように思い出されます。

豊富温泉は大正14年の石油掘削の際、天然ガスを伴った温泉が噴出したことが端を発します。温泉水に油分が混じり、石油臭がする温泉水は４抗井から天然ガスと共に採取し温泉水は町営ふれあいセンターを中心に3軒のホテルに供給され、天然ガスは地域エネルギーとして温泉街のホテル等事業所他、間もなく製造販売が開始される豊富牛乳を原料としたヨーグルト工場にも供給がされ、貴重な泉質の温泉と共に大きな町の財産となっています。

２．変わる豊富温泉

昭和の中期には日本最北の温泉郷として、約15軒の旅館街が形成され、町民や近隣市町村からの多くの観光客、また昭和後期には利尻・礼文の最北観光の波に乗り、多くの道内外観光客で賑わいましたが、平成に入り旅行形態が大きく変わり観光客も激減、また、近隣市町村にも次々と温泉施設が出来上がったこと等から旅館やホテルも次々と閉店し、温泉街が形成できなくなりました。

しかし、一般観光客が減るに従い反比例する形で尋常性乾癬の患者の中で「豊富温泉の石油臭いお湯が肌に効く！」と話題になり、口コミで全国に広がり始めました。元々温泉は近くの炭鉱で働く方や当時の石炭、薪ストーブによる火傷や漆かぶれ等、皮膚に効能がある温泉と伝えがありましたが、一般的皮膚病患者の中で大きく評判が上がることは大きな驚きでした。

その後、尋常性乾癬だけでなくアトピー性皮膚炎にも大きな効能があると評判は広がり、全国各地から湯治においで頂くように変わってきました。湯治客の皆様から「奇跡の湯」、様々な治療を受けてきたが、中々改善しないためダメ元と思って来た温泉に救われたという「最後の砦」（とりで）とまで言われる言葉をこれからの豊富温泉の目標とすることが必要と決心し、平成26年を豊富温泉再生元年と位置づけ、従来の「観光型温泉」から「療養型温泉」に明確に目標を設定し、様々な整備を推進することといたしました。

３．心の湯治

アトピー性皮膚炎や尋常性乾癬の方にとって痒みを中心とした身体の不調による通学や仕事の困難性、皮膚病による外見を気にして心を病む方等が多いことから体のケアだけでなく心のケアも重要との判断から平成21年に温泉活性化協議会に委託し、ふれあいセンター内に湯治や生活相談ができるコンシェルジュデスクを設置すると共に、保健師資格者を健康相談員として、心と身体のケアを行えるようにして参りました。コンシェルジュデスクのスタッフ自身がアトピー湯治で来た方が中心のため、自分の体験を含めて親身に相談に当たって頂いていることで高い評価を頂き、湯治客は増え続けています。

豊富温泉での湯治療養をされる皆さんが、身体の療養と併せ未来に夢や希望を持って心を新たに誕生させる場所としてなって頂くことが私たちの強い願いであり、身体と併せた「心の湯治」の充実をこれからも図っていくことが必要不可欠な要素だと認識しています。

４．ミライノトウジ

本年7月に念願であった「温泉利用型健康増進施設」の厚生労働省認可を頂き、8月より受け入れを開始しました。「温泉利用型健康増進施設」とは、医師から温泉療養指示書を受け取り温泉で一定の基準に沿った療養を行うことで、施設の利用料や往復交通費が医療費控除を受けられるという制度です。

開始から8月に25名、9月も17名が医師からの指示書を持参されており、昨年全国20か所の認定施設で合計約80名の利用者の半数を2か月で達成できました。これは本町の力だけでなく、健康と温泉フォーラム会員の皆様のご協力と豊富温泉を応援して頂いている全国の皮膚科医の皆様のご協力があってこその賜物と思われます。スタートから多くの皆様にお越し頂いておりますが、まったく初めてのため、町及びスタッフ一同も試行錯誤を繰り返しながらの受け入れを行っており、利用者の皆様にも多々ご迷惑をお掛けすることもあろうかと思われますが、ミライノトウジのスタートとしてご理解頂きたいと思っております。

５　おわりに

北海道の北の端で交通の便も非常に悪い超田舎の温泉に多くの湯治客の皆様にお越し頂いております。湯治客の皆様にはその田舎故のご不便もお掛けしております。

町として、ソフト面と併せ施設のハード面を早急に充実して参りたい気持ちも強く持っておりますが、人口4000人の町の年間財源には限りがあり、中々スピード感を持って整備に当たれないジレンマも抱えております。湯治者の多くの方のご要望やご期待にも全てお答えすることは厳しいこともご理解頂き、まず基本となる温泉水の安定的確保、そして受け入れ態勢の医療を含めたソフト面の充実と併せ、ふれあいセンターの改築整備に入る予定としています。国に対しましても温泉を利用した健康づくりがこれだけ有効であることも健康と温泉フォーラムに集う全国の自治体とともに呼びかけ、補助金や制度の充実を訴え、小さな町の財産というよりも、全国のアトピーや尋常性乾癬でご苦労されている多くの皆様方の財産として利用頂くことを念じながら温泉大国日本の北の砦となるよう努力したいと考えております。

コーディネーター

原田 啓一郎

はらだ　けいいちろう

駒澤大学法学部教授

長野県生まれ。
専門は社会保障法。
2002 年駒澤大学法学部専任講師
2008 ～ 2010 年パリ第 1 大学にて在外研究に従事。
2012 年　現職。

関金温泉の歴史は古く、行基の開湯伝説から 1300 年を迎えます。関金の地には、江戸時代に関所が設けられ、作州街道と大山への分岐点にあたる宿場町として、また湯治場として人々の往来がありました。昭和期には、国鉄の倉吉線が関金駅まで延伸し、関金温泉にも多くの来湯客が訪れた時期もありました。関金温泉は人々が行き交う交流の場であり、地域の人々の生活とともにあり続けてきた温泉地でした。古くから「白金の湯」と称され、地域の宝として愛されてきた関金温泉の湯は、いまこの瞬間もかつてと同じように、地球からの恵みとして湧出しつづけています。

しかし、社会環境の劇的な変化は容赦なく押し寄せ、宿泊施設の老朽化や後継者不足、人口減少等、関金温泉を取り巻く環境も大きく変化し、関金温泉はかつてのような賑わいを失いつつあるのが現状です。一方で、私たちの働き方や人生のあり方も「人生 100 年時代」のなかで変わりつつあります。1300 年の時を経てもなお関金温泉で変わらないものと、今日の社会で変わりつつあるものを私たちはどのように調和させていけばよいのでしょうか。

関金温泉は、緑豊かな自然環境や閑静な環境に加え、運動施設や遊歩道といった健康づくりの環境にも恵まれており、倉吉市民や他の周辺住民の保養・休養や健康増進をする場として魅力のある温泉地です。開湯 1300 年の節目を機に、関金温泉を守り続けてきた人々との時代を超えるつながりに思いを馳せつつ、地域とともに生き続けてきた関金温泉を絶やすことなく次世代につないでいくために、市民フォーラムが、市民の皆さんと一緒に関金温泉のこれからを考える時間になればと願っております。

地域健康づくりの中の『ひとづくり』～「まちの保健室」の取り組みから～

近田 敬子

ちかだ　けいこ

鳥取看護大学　学長

1961 年 京都市衛生局入職。
以降、看護学教育一筋に歩んでいる。
京都大学医療技術短期大学部助教授。
兵庫県立看護大学教授
（現、名誉教授）。
園田学園女子大学学科長。
2015 年より現職。
いずれも新設校の立上げに関わった。
阪神淡路大震災後に「まちの保健室」事業を立ち上げ、厚生労働大臣表彰（公衆衛生事業）を受けた。
鳥取県においても「まちの保健室」を展開している。

■鳥取看護大学は「まちの保健室」になぜ取り組んだか

本学は、本来、鳥取県における少子高齢化の進展、慢性的な看護師不足、医療の高度化に伴う質の高い看護師養成の必要性などを背景として、地域社会の強い要望と多大な財政支援を受けて設置された大学である。一口で言えば、慢性的な「看護師不足」の対応策の一貫として設立された大学である。しかし、筆者が当地を訪れた時に目にした風景から、別の期待が潜んでいると感じた。それは、看護大学の中部地区誘致を推進する会による「看護大誘致実現　中部はひとつ！」の懸垂幕が倉吉駅前に設置されていたこと、また「中部はひとつ！看護大学を倉吉に」と記されたのぼり旗をまちのあちこちで見かけたことなどに起因する。看護師確保のための養成を要望する文言ではなかった。どちらかと言えば、中部が一丸となり、中部に高等教育機関を誘致することの熱意が感じられた。そして若い学生（定員 320 名）が集まることは、新しいまちづくりに繋がり、街の活性化ひいては地域創生に期待がかかっていると感じた。

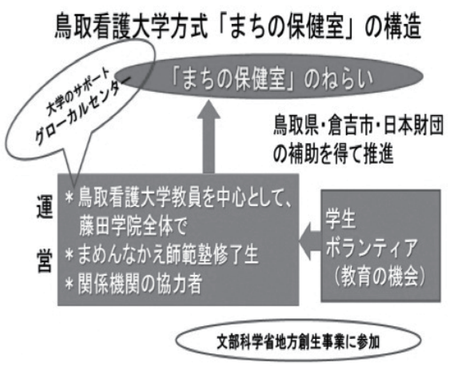
正直なところ、戸惑い・驚きも大きかった。看護大学の教師陣は看護者を中心とした集団であるため、鳥取県の保健・医療・福祉における社会的要請をどのように見極めていくかが重要となる。また、山陰の地方都市における高等教育機関としての個性や特色をどのように打ち出すかも議論になる。何といっても、大学の教育や研究の特色は勿論のこと、早急に地域貢献の位置づけの明確化が迫られた。第一義的な看護者養成を基底において、何をどの程度、どのように教育と研究と地域貢献を絡ませながら、限られた陣容の中で、大学の方針である「地域とともに歩む」という使命を、如何に果たすのかが問われ、「まちの保健室」に取り組むこととした。

「まちの保健室」のねらいは、気軽に立ち寄れて、心とからだの健康をチェックし、学校の保健室のような、いろいろな話や相談ができ、お茶を飲みながらホットする場所になれば良いとしている。さらに、地域の人と人の交流ができ、そして若者（学生）との関わりもでき、笑顔がみられるような場になればと努力している。学生がボランティアとして参加していくことを地域貢献の一つとして大事にしているのが特徴である。教員の奮闘もさることながら、若い学生の存在そのものや活力が地域・住民に刺激を与え、ひいては地域の活性化に貢献できると捉えている。この表は、或る地域でのインタヴューの結果である。表のような「まちの保健室」の機能が抽出された。これに照らし合わせてみると、関金温泉地での「まちの保健室」は、温泉効果とともに③④⑥が顕著になるのではないだろうか。

表１．住民からみた「まちの保健室」の機能

① 身近な健康話題に触れる機会
② 健康に関する気軽な相談・確認の場所
③ 気になることをゆっくり何でも語れる場
④ 居場所・ふれあいの場所
⑤ 簡単な健康チェックの機会
⑥ 交流・仲間づくりの機会
⑦ 体のこと・病院のことに詳しい人がいる
⑧ 医療に繋げてくれる人がいて安心　など

次の図は、「まちの保健室」の運営体制を表現したものである。活動主体は、鳥取看護大学の教職員であることは言うまでもない。活動・推進していくためには機器類や消耗品も必要になり、鳥取県や倉吉市および日本財団などから補助金を得て、運営してきている。平成 29 年度から藤田学園としてのサポート体制が整い、活動がより活発に拡大していく方向にある。しかしながら、限られた陣容の中では限界がある。運営主体の構想として、近い将来において地域健康づくりの担い手は、互助或は共助の思想で推進することが妥当だと考えた。すなわち、大学は「地域社会の主体的な取り組みを支援する」というサポーター役に徹することが本来の姿であろう。そのためにはプロセスが必要である。



■まちの保健室」がらみでの『ひとづくり』

大学は教育機関であるため、ひとづくりは使命の一つである。すなわち、学生の育成は勿論のこと、地域の皆さんの生涯教育も担わなければならない。昔から大学の知的財産を提供するために公開講座などで、生涯学習を主流にした社会貢献活動を展開してきた。近年、もう一歩踏み込んだ生涯教育の活動が問われて久しい。小規模な単科大学であってもその社会的役割を果たしていかなければならない時代である。

１）地域志向型学生の育成

本大学は、開学した年度に文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（ＣＯＣ＋）」の参加校となり、既に構想を練って実践していた「まちの保健室」活動を中心として、地域の人々の生活と健康を支える力の育成に取り組んだ。学生がボランティアで「まちの保健室」に取り組むことを前述したが、あくまでも教育ボランティアであり、教科とのつながりも密接である。学生に対しては「地域志向科目」を設け、知識で得た地域理解を「まちの保健室」での経験と結び付ける、いわゆるインターンシップ機能を果たしている。さらなる、地域での活動が意義ある楽しいものになっていくよう強化していかなければならない。

２）民・学・官と協働できる人材の育成

他方、看護大学が関われる地域住民の皆様に向けた生涯教育は、知識のみならず、実践力を身に付けてもらうことが大事であると考えている。看護学は実践の学問であると言われており、看護の実践が特徴になると自負している。そこで、地域で住民の皆様が主体的に健康づくりに取り組めるための人材育成を構想し、「まめんなかえ師範塾」と称して、地域の健康づくりリーダー育成することになった。

■「まめんなかえ師範塾」の内容

「まめんなかえ師範塾」の修了生は、当面、「まちの保健室」事業の推進役となり、地域住民の健康づくりリーダーとして活動する人材としている。そのためのプログラムは、３日間でおよそ表の通りの内容である。「まめんなかえ」とは、倉吉の方言で「お元気ですか？」という意味である。心からこのような言葉を語り掛け合うことができるのは、やはり地域住民の皆様同士であると捉えている。

この事業は、塾の修了者を輩出するのみならず、身に付けた実践力を、本学の教育サポーター人材バンクに登録してもらい、地元の「まちの保健室」で協働して活動してもらうのは勿論であるが、他にも幅広い活動

ができるように、フォローアップ研修も組み込んでいる。ちなみに、平成 27 年度からの累積で、修了生計 75 名を輩出している。

■温泉地での「まちの保健室」の効用　～まとめにかえて

ラジウム温泉の効能は、神経痛・リウマチ・筋肉痛・痛風および慢性皮膚病などと言われているが、詳細なメカニズムなどの解説は専門家に委ねたい。「まちの保健室」の効用としては、機能的には前述したとおり、温泉にリラックス効果があるとするならば、気になることをゆっくり何でも語れる・相談できる雰囲気の場となるだろう。また、温泉を目当てにやって来る人々の機会を捉えての、「まちの保健室」の開催は、やり方によってはふれあいの場・仲間づくりの機会になり、何よりも集まった人々と交流する機会となる。このことがとても楽しい場になるならば、笑顔に溢れ、健康感を醸し出すことに繋がる。温泉という湯の効果とともに、「まちの保健室」開催ということになると、集客力は高まると考えられる。反対に、温泉離れしている現在にあっては、「まちの保健室」による集客力により、温泉の魅力に触れる機会をつくることになるともいえる。

「まちの保健室」による集客力により、温泉の魅力に触れる機会をつくることになるともいえる。

文献
1) 近田敬子他：鳥取看護大学における地域貢献の構想、平成 27 年度地域貢献委員会報告書、2015
2) 近田敬子他：現職看護師の地域ボランティア活動における力量形成の構造～「まちの保健」を拓くかかわりをとおして～、ヒューマンケア研究助成成果報告書、2004

市民フォーラム「地域とともにいきる温泉―健康づくり、ひとづくり、まちづくり―」

森貞 福恵

もりさだ　ふくえ

関金ラジュームデイサービスセンター施設長

平成13年社会福祉法人みのり福祉会入職。
障害者施設・母子支援施設・ケアハウスを経て平成20年関金ラジュームデイサービスセンター開設、施設長となり現在に至る。

社会福祉法人みのり福祉会は、保育園、障害者施設、高齢者福祉施設を含め２４施設があり、多種多様な事業が共同しながら福祉サービスの充実を図り、地域福祉コミュニティ「福祉の里」の実現に向かって、日々取り組んでいます。

私が勤務する関金ラジュームデイサービスセンターは、矢送川の、のどかな河原と蒜山、大山の山々に囲まれた倉吉市関金町でラドン温泉を活用したデイサービスと宿泊サービスを提供しています。

高齢者の方々と関わり、年を取っていくということがどうゆう事か、高齢化の進展とともに認知症の人数も増加している現状を共有し、これからの介護施設の在り方を考えて行けたらと思います。

高齢者と一口に言っても、まだまだお元気な方から介護の必要な方まで、心身の状態はさまざまです、個人差は大きいものの誰もが徐々に色々な機能が低下していきます。例えば、

１、動作や反応が鈍くなりペースが遅くなる（車の運転などで、アクセルとブレーキを踏み間違える等の事故が多く聞かれます）

２、不安感や疎外感を感じ閉じこもりがちになる（環境の変化や配偶者の死といった喪失体験から老人性うつ症を発症される方も多い）

３、五感（視覚・聴力・触覚・味覚・臭覚）が衰える（感覚細胞の変化や減少、感覚を脳まで伝達する機能の低下による）

４、自分の価値観に固執しがちになる。

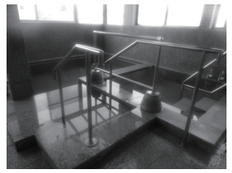
５、転倒しやすくなる（足腰の機能低下など様々な要因で歩行時のバランスが取り難い状態になる）等心身の機能は低下していきます。

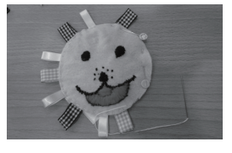
ご利用者様からも、よく耳にする言葉が「情けない」という言葉です、今までで出来ていたことが出来難くなったり、時間が掛かったりと思う様に出来ない喪失感から出ている言葉です。

そして次に認知症のことを心配されます、誰でも年齢とともに、物覚えが悪くなったり、人の名前が思い出せなくなってきます。こうした「もの忘れ」は脳の老化によるものですが、認知症は「老化によるもの忘れ」とは違います。認知症は、さまざまな要因で脳の神経細胞が壊れる為に起こる症状や状態を言います、進行するとだんだん理解する力や判断する力が無くなり社会生活や日常生活に支障が出てきます。みなさんが認知症になりたくないと日々思っておられます。

ところで、認知症になりやすい人の傾向があるようですがご存知ですか、その特徴を知ることも予防や改善に繋がる第一歩かもしれません。

•性格編：几帳面で真面目・ネガティブ思考・人見知り・短気で怒りっぽい
•生活習慣編：肉をよく食べる・野菜が苦手・間食をよく食べる・お酒をよく飲む・お腹いっぱいまで食べる・運動をする習慣が無い





•ヘルスチェック編：太りすぎまたは痩せすぎ・高血圧の傾向がある・糖尿病の傾向がある・睡眠障害、慢性的な寝不足

「認知症になりやすい人」の特徴について、ドキッとした項目はありましたか？

実は、私も何点かあてはまる項目がありドキッとしました。

このように、心身の機能低下の予防や認知症の予防と進行を遅らせる取り組みが私たちの役割となっています。

デイサービスの利用目的は一人一人違っていますが、ケアマネージャーがご本人やご家族様の希望や目的を聞きとりケアプランを作成しデイサービスでの支援を行っていきます、デイサービスを利用するメリットは、在宅で過ごす上で社交の場が出来る、活動の幅が広がる、在宅では難しい入浴が出来る、規則正しい生活で、日常のリズムが出来る、ご家族の負担軽減に繋がる、客観的に健康管理が出来るなど、不自由になって自宅に引きこもりがちな高齢者に「通う楽しみ」を提供し、外出する機会、体を動かす機会、社会と繋がる機会を作ります。

デイサービスを利用されない高齢者の方にも地域で「通う楽しみ」のある場所が必要だと思います、各公民館で包括が中心に地域つくり、地域の中で繋がりを作っていきたいという思いで、認知症予防教室やサロンなどを定期的に行っておられますが、その公民館さえ出ていくことが難しい方も多いようです、先日その教室に当事業所が参加させていただき介護予防体操や認知症予防について一緒に勉強させていただきました、地域の介護施設を知っていただく事、専門職として相談の役割などを考えています、住み慣れた地域で活き活きと暮らしていける地域つくりを包括等と連携を取りながら、地域の皆さんの声を聴きながら、私たちに出来ることはなんなのか今後も地域交流を続けながら一緒に考えていきたいと思います。

ご利用者様から、「デイサービスに来るのが待ちどうしい」の声をいただきます、どんなところがいいですか？と尋ねると、温泉に入れるし、料理はおいしいし、いろいろと体操を教えてもらえるし、デイで友達になった人と一緒に工作したり、いろんなことを話して泣いたり、笑ったり大変な時代を生きて苦労もしてきたことが分かり合えるからと、話されました。

そして一番多かった声は、温泉に入れるからでした。

当施設は開設時から関金温泉を活用していますが、ご利用者様から「芯まで温まっていつまでもホカホカする」「温泉に入った日は神経痛の痛みが無くなる」「体が楽になる」など、たくさん声をいただきます、私は「関金温泉は、名湯百選に選ばれた温泉ですからね」と自慢しています。関金温泉を活用できていることは誇りです。

私自身も仕事の疲れを癒すため幾度となく温泉を利用します、温泉は身体をほぐし、心を癒してくれる「生きる力」を与えてくれる場所でもあります。

たくさんの方が疲れを感じた時「温泉に行こうかな」と思い、足を運ばれていると思いますしかし、介護が必要な方は温泉旅館を利用することがなかなか出来ません。

「家族や他の人には迷惑をかけたくない」という思いや「健康状態に不安があるから」「ご家族も介護が出来ない」などの理由で、ご家族での温泉旅館利用をあきらめておられる方が多いいようです。そこで、この不安を解消し、ご家族で温泉に入り背中を流し、家族団らんで話が出来るプランを関金温泉組合と協働で作り何組かモニター利用を行っていただきました。介護サービスが付く事、家族でゆっくり出来る時間がある事は魅力だったようです、お食事も、ご利用者様に合わせた形態で提供することができるので良かったと話されていました。

まだまだ検討する点、改善する点はありますが、実施出来る様に協力していきたいと思います。そして、全国どこからでも介護が必要な方も、そうでない方も温泉旅行が利用できるように「笑顔になれる温泉」「元気になれる温泉」を目指して倉吉市民が関金温泉の素晴らしさをもっともっと自慢していくことが一番ではないでしょうか。

芦田 倍芳

あしだ　ますよし

関金温泉旅館組合事務局長

一般社団法人
分子整合医学美容食育協会
鳥取中央支部　支部長
有限会社トラベルシリウス
取締役
せきがね湯命館　支配人

1．開湯 1300 年の歴史と「源泉回帰」の関金温泉

諸説ある関金温泉の開湯伝説の中で、奈良時代の養老年間 717 年～ 724 年に鶴が入浴しているところを、行基が発見し、その後、弘法大師が再興したとの伝承を、関金温泉の歴史のはじまりとし、2017 年～ 2024 年を「開湯 1300 年」と位置づけました。

関金温泉の発展のきっかけとなったのは、741 年（天平 13 年）に国分寺建立の詔が出され、伯耆の国の国分寺が近隣に置かれたことだと考えられます。伯耆の国は、東大山山麓の潤沢な伏流水と豊かな土壌に支えられた、文化･産業･交流の中心として栄えました。伯耆国庁から南に数キロ離れた関金温泉は、当時から人々の癒しの場所、保養の場所として賑わいを見せていたことが想像できます。また、江戸時代には、伯耆（鳥取県）と作州（岡山県）をつなぐ作州街道の拠点として関所が設けられ、「関の湯」と呼ばれるようになり、さらに、1877 年（明治 10 年）には湯関宿と金谷村が合併し、関金宿が誕生し、「関金温泉」と呼ばれるようになりました。

1300 年の歴史ある関金温泉。私たちが今後もこの温泉に入り続けられることや、温泉を資源としてこの地で商いを続け、地域を繁栄していくためには、これまでの歴 史を振り返りその根幹を守りながら、現代 に求められる温泉地として変化していくこと が要と考えます。

今年から 2024 年までの 7 年 間は、「源泉回帰」年間として、一過性ではな く根幹の温泉地づくりを目指します。

私たちは取り組みを進めるにあたり歴史を紐解くことで感じたのは、どんな時代も人と人とが行き 交う「交流拠点」であったことと、この地に暮らす人々が、この温泉を有効活用し生活の中の「保養の場」であり続けたことでした。

これらの教えから、私たちがこれからの関金温泉で提供していくのは、豊かな自然に恵まれた資源を有効活用し、「交流」の機会を増やし、滞在価値を高めることと、暮らす人々のライフステージによって生活環境が変わっても、いつも身近な「保養」の場として人生に寄り添う温泉であることだと考えました。

このことを社会的背景に照らし合わせると、源泉回帰年間の 7 年間は、東京オリンピック前後の日本の観光業界における大きな分岐点ともなる重要な期間で、少子高齢化や人口減少の社会的課題を背景に、働き方やライフサイクルそのものの考え方や行動が変化する期間となります。インバウンドによる訪日外国人の増加もさることながら、人々にとっての旅の目的も大きく変化をしていく中で、関金温泉がどのように存在し、どのような価値を提供していくかを考えると、温泉そのものを「観光」資源だけでなく、資源そのものを活かす「環境」資源の視点と、人生に関わる「健康」や「介護」と言った多様性ある温泉の活用が必要です。

このような視点で見ると、関金温泉は、大きな歓楽地や観光地として発展して来なかった代わりに、自然資源がありのままに存在し、暮らしの中にある温泉として存在している事そのものが大きな価値であり財産だと考えます。

それは、これからの時代に本当に必要な温泉地づくりに欠かすことの出来ない基盤であり、チャンスであると考えています。

2．プラチナプロジェクトによる温泉地づくり

多様性ある温泉の活用の中で、温泉を「観光」「健康」「介護」分野で、関金エリアの自然資源を活用しながら、温泉地をつくるプロジェクトとして、2013 年に関金温泉旅館組合を中心に倉吉市との官民連携事業として立ち上がったのが「プラチナプロジェクト」です。

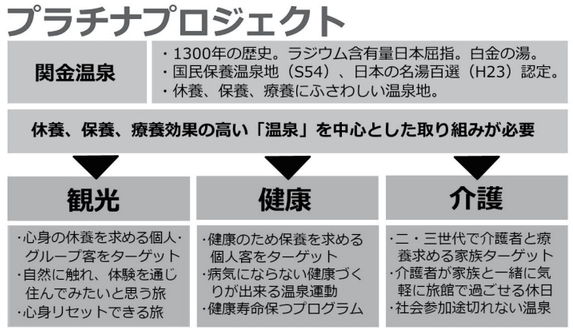
プラチナには、歴史の中で「白金の湯」の異名を持った関金の愛称と、超高齢者社会を迎え、その後期高齢者を対象とした呼称プラチナ世代が最期まで元気に温泉に入り続けることが出来る地域社会を目指すという想いが込められています。私たちが取り組んだのは、まずは地域に愛され、地域の自慢となる温泉地にするために、身近な温泉として市民の方により活用していただく機会を提供することと、温泉という１つのコミュニティの場を健康や介護の場面で活用され、社会的な接点が保たれ、人生にとってかけがえのない保養と癒しの場になることを目指すことでした。

この取り組みの未来には、暮らす人々のＱＯＬを向上するだけでなく、往来する旅人にとっても旅の滞在価値を高めるものと考えています。

（1）プラチナプロジェクトの概要

下記のとおり、温泉を「観光」だけでなく「健康」や「介護」分野の視点で活用を考え活用していくプロジェクトです。

＊1「プラチナプロジェクト概略図」

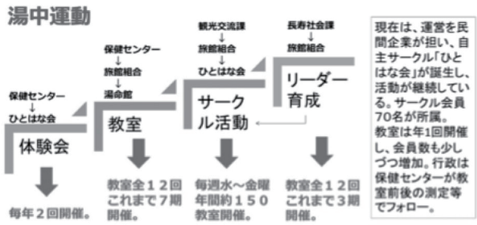


（2）温泉の健康利用

温泉を活用し、健康づくりと介護予防を目的とし、健康寿命を延ばす取り組みとして、2014 年より水中運動を温泉でおこなう「湯中運動」を取り入れました。この取り組みは、倉吉市と関金温泉旅館組合が協働し、湯中運動体験会からスタートして、教室、そして自主活動につなげる為にリーダー養成を実施しました。下記の図が、湯中運動の取り組みの仕組みを表にしたものです。

現在では、倉吉市の公共施設「湯命館」を活動拠点として、旅館組合から民間企業が事務局運営を引き継ぎ、自主活動サークル「ひとはな会」が発足。会員数は 70 名に達しています。この活動において、身体的な結果は、教室前後で数値をとっており、次頁の図のとおりとなっています。

＊図２「湯中運動の展開図」



この結果を踏まえ、多くの参加者が身体の不調を改善または維持しており、温泉を活用した運動の成果が出ています。また、サークル活動については、参加者にとって大切な居場所となるコミュニティが形成され、日常生活においても無くてはならない存在となり、心身の健康につながる活動になっています。

今後もサークル活動を中心として、より多くの方が温泉を活用した湯中運動で健康が維持、改善ができるよう、取り組みを拡げていくためには、公共施設「湯命館」を中心に、行政・企業・住民活動が連携しながら地域の健康課題も含め取り 組みを進めていかなければなりません。その為には、温泉を活用した健康づくりに対しての インセンティブ制度の確立や、国が定める温泉利用 型健康増進施設の認可による利用者の負担軽減、サークル参加者がより安定的に持続して健康づくりが行えるよう医療・看護・介護連携を進めていきたいと考えています。

＊図３「湯中運動による身体の変化について

湯中運動「実績①人数実績」

平成２５年度実績（教室１期・２期含む）
・延べ湯中運動参加人数　１,１０６名
・サークル活動登録者数　　１５名

平成２６年度実績（教室３期・４期含む）
・延べ湯中運動参加人数　１,７５３名
・サークル活動登録者数　　５２名

平成２７年度実績（８月現在）
・サークル活動登録者数　　６５名

普及・増加傾向

湯中運動「実績②改善効果」

平成２５年度　第４期教室実績より

教室8回(自主トレ４回含む)「ヒザ・腰シャキッと湯中運動教室」慢性の関節症者でかかりつけ医から運動の制限を指示されていない者20名の参加者の内、教室前後のデータ測定の出来た17名(女16男1平均年齢64.5才)について対応の有るT検定(*；p<0.05)を行った。
その結果、収縮期血圧、拡張期血圧、長座体前屈、開眼片足立ちについて有意な改善が認められた。又、痛みのスケールに於いても、軽減10名58%、維持4名24%、増加3名18%であった。増加の3名も10月の聞き取りによれば、農繁期での作業量増によるものと推測された。

情報提供：倉吉市保健センター／古賀眞澄

（３）温泉の介護利用

日常生活を送ることが困難となった要介護者は、当然ながら、温泉旅行や日帰り温泉入浴の実現も途絶え、人生の中の楽しみや社会のコミュニティから一線を置くケースが多いのが現実です。当たり前のように身近にあった温泉が、遠い存在になることは、本人にとってもご家族にとっても現実を受け止めるのは苦しい出来事です。私たちは、ライフステージによって生活環境が変わっても、温泉がいつでも寄り添える場所でなければならないと考え、介護者とその家族が、日常生活が困難になっても、温泉旅行や温泉入浴が身近な存在であり続けるようにとの思いで、取り組みはじめたのが、「介護付き温泉旅館利用サービス」です。

このサービスは、地域の介護福祉施設と旅館が連携し、介護福祉施設に入所している要介護者とその家族が、介護資格者の介助と旅館の受入れ体制を整え、再び温泉旅行を実現していただく取り組みです。

これまでに３回のモニタリングを実施し、今年度より、産官学連携による実証実験も行い、来年度より、民間旅行会社を中心に、行政・企業が連携して商品化を目指しています。

＊図４介護付き旅館利用サービス「ふたたび温泉」

３．温泉まちづくりの今後の取り組みと課題

来年開山１３００年を迎える大山。今年開湯 1300 年を迎えた関金温泉。歴史からも大山との関連性は高く、歴史や文化、資源の掘り起こしは、今後のまちづくりにおいて重要なポイントとなります。
旅館組合では、プラチナプロジェクトで進めてきた「健康と介護分野」の取り組みは、民間企業に役割を引き継ぎ、事業として進展させ、より多くの方が、温泉をいつでも身近にいつまでも利用できる環境を整備していきます。

そして、「観光分野」については、関金温泉旅館組合を中心に、関金エリアの各 団体と協働し、開湯 1300 年を契機に、大きな視野で捉 えた「東大山山麓エリア」の観光資源をリブラン ディングし、国内外からの集客に繋げていきたいと考えています。

東大山山麓は、ありのままの自然が残る未開拓の地です。このエリア全体をブランディングし、自然と共存した体験観光を推進していくためには広域的な連携と個々の取り組みが集結していかなければなりません。
そして、温泉地全体では、スポーツ＆ウェルネスツーリズムという大きな枠組みで、既存の資産と周辺の自然環境を活かした、スポーツやアクティビティ（運動）・食（栄養）・癒し（休養）を掛け合わせたコンテンツを充実させ、住民にも来訪者にとっても様々な滞在スタイルで保養ができる温泉地をつくっていくことが重要だと考えています。

関金温泉には、大山池や廃線跡、清流の野添地 区など特徴的な自然資源と、温泉地内にはスポー ツ施設やウォーキングコースなどが整備されて いる他、自転車やトレッキング、ボルタリング、登山といった個人からグループまでが楽しめるアウ トドアスポーツの拠点として有意な立地にあり ます。現に合宿や学生旅行で選ばれている実績 があります。

「関金温泉」を交流と保養の拠点として、開湯1300 年の「源泉回帰年間」で、滞在する宿泊施設の個店強化や再生、温泉地から自然体験エリアまでの導線の整備、滞在時に体験できる様々なアクティビティのプランニングを取りまとめ広く情報を発信していくことが重要です。

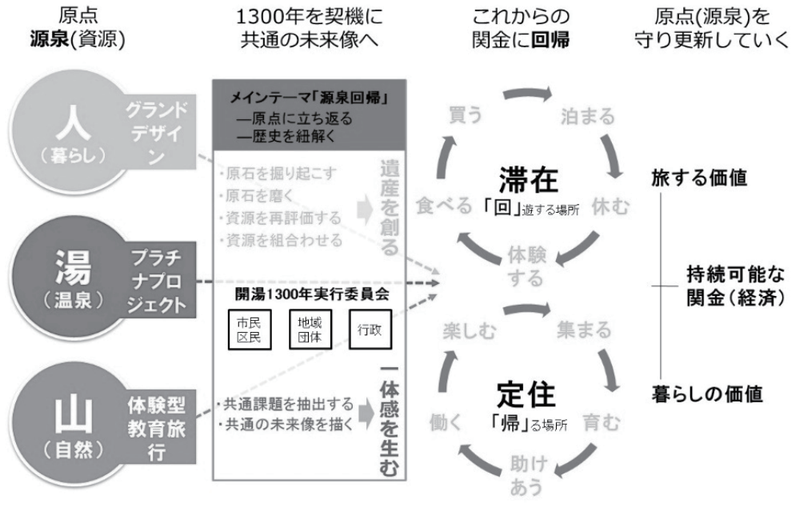
日本の古来からの湯治は、温泉に長期滞在し温泉療養を行うものでした。現代においては、温泉を滞在の中心としながらも、周辺に広がるありのままの自然資源に触れ、暮らしを感じ、体を動かしたり、風や山や川の空気を感じたり、歴史に触れ文化 を感じたり、その地で採れた食材を味わったり と五感で楽しみ、コトを楽しむ、心も身体もス トレスフリーになる新しい温泉の過ごし方（新 湯治）が求められていると感じています。

これらを提供し、より多くの方が、より長い日数を、関金温泉を拠点に滞在していただけるよう目指していくことが、関金温泉のまちづくりの着地点だと考えます。

私たちの考えるまちづくりは、住民や企業が元気になる為のきっか けとなる取り組みを行政と地域団体が連携 して取り組み、成長過程において、それを担う住民や企業に役割を引き継ぎ、役割を担った者が、さらに発展 させ地域に根付かせていく一連の活動だと考えています。

まちづくりの推進には、官民がそれぞれの 強みを活かし連携していくことが必要不可欠です。この地に暮らす人々が、温泉を活用し、温 泉を愛し、温泉を自慢に想い大切にしてい くこと。企業は絶え間なく自助努力を重 ね、事業を通 じてその役割を果たしていくこと。そして、行政は人材や情報、ネットワー クやビッグデータなど情報を共有し、目 指すべき町の未来を地域とともに考えていくことで、関金温泉が現代に必要な保養温泉地へと発展していけるものと思います。源泉回帰年間で、温泉を核として、多くの人々の心身が癒され、喜びを分かち合える温泉地を目指していきたいと思います。

＊図５「関金温泉の未来とまちづくりの関係図」



関金温泉湯中運動サークル「ひとはな会」の活動について

福井 真喜代

ふくい　まきよ

ひとはな会　副会長

平成 25 年４月
第１期湯中運動リーダー
養成講座終了
平成 25 年リーダーとして認定
平成 25 年から現職

•湯中運動とは

　プールでの水中運動を温泉の浴槽や自宅の浴槽で出来るようにしたもので、暖かい温泉に浸かりながら手足を交互に伸び縮みさせて血行を良くし、筋肉と関節のバランスを整え、動きやすい身体にしていく。
慢性の肩、腰、膝、股関節の痛みがある方に大変効果がある。この運動は㈱パルフィットシステム代表取締役で健康運動指導士、温泉利用指導者の古賀真澄先生から指導をうけている。

関金温泉湯中運動のあゆみ

平成 24 年６月
九州菊地･長湯温泉を視察し湯中運動と出会う
平成 24 年８月
旅館･介護福祉関係者の湯中運動体験実施
平成 25 年４月
第１期ヒザ腰シャキッと湯中運動教室スタート
第１期湯中運動リーダー養成講座スタート
平成 25 年 10 月　湯中運動自主サークル活動スタート
平成 26 年６月　関金温泉湯中運動サークル「ひとはな会」発足 名称･規約･予算･役員等決める
サークル名称を「ひとはな会」とし、「自身の健康増進と介護予防」を目的としている

3. 活動内容について

・会員　リーダー会員２０名
　　一般会員５０名
　　計７０名
・開催日 毎週水・木・金
・時間　湯命館営業前を利用して
　　午前９時から午前１０時５０分
９月から「湯中運動の日」として、グリーンスコーレせきがねの休館日を利用し２名以上の予約で午前１０時から午後３時で実施
・内容　湯中運動「湯の花体操」
湯上体操・呼吸法・肩甲骨の調整・背骨の調整・骨盤の調整
全身運動・引き締め（ボール･バンド）
・その他　ひとはな会総会　　５月
せきがね健康温泉サミット
リーダー会 救命救急講習
先進地視察研修
ひとはな会ランチ忘年会
みんなで楽しくクッキング
ポーセラーツ体験会
ローズキャンドル手づくり体験教室
豆腐づくり
そばうち

４．活動を通じての感想および問題点、今後の方向性

　会員は皆、肩･腰･膝・股関節等何らかの身体の不調を抱えて参加している。また、家族の介護や孫の世話などをしながら湯中運動に来ているため、途中でやめたり、休会する人もある。しかし、続けていると膝や肩の痛みが緩和し、毎日の生活が楽しくなったり、体重が落ちたり、全く汗の出なかった人が汗が出るようになったりしている。受け身の動作も取り入れて続けているが、農作業などで転んだときにとっさに頭を打たないように上手に身体をかばっているなど効果がある。

　この湯中運動での会員同士が程よい距離を保ちながら、大きな声で笑ったり近況報告やおいしいお店を紹介したりと、湯中運動だけをして帰るのではなくこうしたおしゃべりが更に効果を上げていると思う。

　会員増を図りたいが、湯中運動教室を実施するためには先生を迎える経費が必要で、困難な状況がある。　ひとはな会に入会するためには、教室を５回以上出席することが条件になっているため、即入会できない。これは、高齢の方や身体に何らかのトラブルを抱えている方の安全面を最大限に考えているため。
関われるリーダーが少なく、負担が大きい。
湯中運動教室を開催するときは、チラシを人の出入りするところに置き情報発信する。
現在、湯上体操は湯命館の和室で一般の利用者と共同で実施しているので専用の場所があればいいと思う。

倉吉市民の健康づくりー健康課題への取り組みー

竹中 啓子

たけなか･けいこ

**鳥取県倉吉市福祉保健部
保健センター　所長**

昭和 56 年関金町役場
保健師として勤務
平成 17 年合併により
倉吉市役所勤務となる。
３年間の福祉課勤務を経て
保健センターに異動となり、
子どもから成人の健康づくり
を推進する２つの係を経て、
平成 29 年４月より現職

１　概要

　倉吉市は、鳥取県の中央部に位置し、北は北栄町と湯梨浜町、東は三朝町、西は琴浦町と江府町、南は岡山県真庭市にそれぞれ隣接している。

　昭和 28 年 10 月１日、２町７村の新設合併により「倉吉市」が誕生し、その後、平成 17 年には、隣接する関金町との合併によって「新･倉吉市」が誕生し､今に至っている。
平成 29 年８月末現在での人口は 47,883 人、高齢化率 32.1% となっている。すでに３人に１人が高齢者という超高齢化社会を迎えている。

　人口動態のうち、自然動態（出生数ー死亡数）は自然減、社会動態（転入数ー転出数）も社会減の傾向にある。

２　健康課題

（1）健康に関する指標より

　鳥取県独自で算出した本市の平均寿命は、平成 26 年　男性 79.01 歳（鳥取県 79.66 歳）女性 86.36 歳（鳥取県 87.14 歳）となっている。

　また、同様に算出した健康寿命は、平成26年　男性77.84歳(鳥取県78.11歳)　女性 83.77 歳（鳥取県 83.74 歳）となっており、平均寿命と健康寿命の差は、介護が必要な平均的な期間とされていることから、本市の介護が必要な平均的な期間は､男性 1.17 年､女性は 2.59 年であり、鳥取県平均と比較すると、その期間は短い。

　さらに、人口動態統計の中で、全国平均を 100 とした時の本市の死亡の状況を示した標準化死亡比で見ると、がんの死因割合が高い。その中でも、胃がん・直腸がん・肝臓がん・胆のうがん・肺がん・子宮がんが多く、これらはいずれも近年一貫して多い傾向にある。
また、急性心筋梗塞、くも膜下出血、大動脈瘤及び解離等、生活習慣に起因する病気で亡くなる人も多くなっている。

　医療費の面から見ると、本市の医療保険の加入状況は、国保 27%、協会けんぽ本人 21%、協会けんぽ扶養 15%、75 歳以上の方で構成される後期高齢者医療保険加入者は 16%、及びその他の保険加入者 21%となっている。

　本市における１人当たりの医療費は、外来と入院をあわせ、平均 285,218 円となっており、県平均の 286,463 円と比較すると１人当たりの医療費は低い。
しかし、保険者別に比較すると、75 歳以上の後期高齢者においては、県平均より高くなっている。

　また、項目ごとに医療費を見ると、生活習慣病に係る １ 人当たりの医療費は 123,798 円（県平均 123,900 円）と低いが、がんに係る同医療費は 30,244 円（県平均 25,580 円）と特段に高い。
さらに、疾病別医療費統計のうち、疾病項目毎に医療費総計金額を見ると、国民健康保険では､「がん」「循環器系疾患」「精神と行動の障害」の順に多い。

　これを同様に、75 歳以上の後期高齢者医療保険で見ると、「循環器系疾患」「筋骨格系・結合組織疾患」「がん」の順番に変わる。

　医療費から見ると、循環器系の疾患やがん等の生活習慣病関連の疾患が多くなっている。

　次に、介護認定状況では、高齢化が進むとともに、要介護となる人も多くなっている状況にある。介護認定の原因として、本人が抱える傷病名として多いのは認知症、筋骨格系疾患、変形性関節疾患等である。
一方、各種健康診査（特定健康診査・がん検診）の受診率は保険者全体でみても20%程度と低い。。

　また、特定健康診査受診者への質問票より、運動習慣のない人の割合が高い、夕食後の間食をする人が多い、喫煙している女性が多い、飲酒の習慣のある男性が多い等、生活習慣の改善が必要な人が多い状況にある。

　これらのことから、保健・医療・介護面から本市が抱える健康課題としては、次の３つがある。

○健康診査（特定健康診査・がん検診）の受診率が低い
○生活習慣の改善が必要な人が多い
○生活習慣病の罹患者が多い

(2) 保健事業の実施

市民一人ひとりが、健康で心豊かに生活できる」ことを目的として、各種保健事業を実施している。重点としては次のとおり。

○子どもの頃からの生活習慣の確立
・減塩対策に関するポピュレーションアプローチの強化
○地域や職域との連携
・各年代層に応じた生活習慣改善のための支援
○生活習慣病の予防と重症化防止
・「運動」「食事」「休養」への取組みの推進
・各種健康診査を受診し、健康状態の確認と経年的な変化への気づきへの支援
・生活習慣病の重症化リスクのある人への支援

3　今後の展望

市民一人ひとりが、健康で心豊かに生活していくために、健康に関する知識の普及と共に、将来を担う子ども達も含めて、地域全体で健康づくりを実践していくという機運を醸成していくことが重要である。

その取組みを進めていくことで、健康への関心も高まり、その結果として、各種健康診査の受診により自身の健康管理もでき、生活習慣の改善により、生活習慣関連の疾患の減少及び医療費の抑制も期待できる。そして、このことは健康寿命の延伸へとつながっていく。

生活習慣の改善を図るためには、継続して意欲的に取り組めるものであること。そして、「楽しい」「誰でもできる」「安価」「いつでも」「苦痛でない」「効果がわかる」「個人でも仲間と一緒でも取組める」等がキーワードとなる。

これまで本市の温泉活用した取組みとして、介護予防を中心に、「ホットいきいき教室」や「ヒザ・腰シャキッと湯中運動教室」「湯中運動の普及拡大に向けたリーダー養成」等を行ってきた。

現在、温泉に特化しての積極的な取組みは進めてはいないが、地域資源を活かした健康づくりの取組みを見直す必要がある。

生活習慣の改善を図り、健康寿命を延伸するために、様々な健康づくりの方法の一つに「温泉」の利活用も含めて、個人が選択できる健康づくり・介護予防の取組みについて検討していきたい。

コーディネーター　合田 純人 (NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事)

温泉地の活性化に向けて　～「新・湯治」の推進～

山本麻衣
やまもと　まい

環境省自然環境局
自然環境整備課
温泉地保護利用推進室長

山口県生まれ。平成７年環境庁（当時）入庁。以来、環境省本省、地方環境事務所等において主に国立公園や野生生物の保護管理を担当、前職は長崎県に出向し自然環境課長として勤務。今年４月より現職

1. 自然等の地域資源を活かした温泉地の活性化に向けた提言『「新・湯治ーONSEN stay」の推進』について

(1) 経緯

環境省では、従来、温泉法の運用を通じて温泉の保護および利用の適正化を図ってきたが、平成 27 年 12 月には「温泉地保護利用推進室」を設置して温泉地の活性化に向けた施策を一層促進すべく体制の強化を行った。その後、全国の温泉関係自治体との意見交換を密にするための「全国温泉地サミット」の開催、国民保養温泉地の指定地域拡大、民間事業への協力（ONSEN ガストロノミーツーリズムへの協力、温泉総選挙における環境大臣賞の賦与等）などの取組を行ってきた。

そして、今後の温泉地活性化の取組を進める上での基本的な考え方を整理するため、本年５～７月にかけて「自然等の地域資源を活かした温泉地の活性化に関する有識者会議（座長：下村彰男東京大学大学院教授）を開催し、多方面の有識者に議論していただき、提言をまとめていただいた。

(2) 提言の概要

提言では、これからの温泉の楽しみ方を「新・湯治」として提案し、その推進のために必要なことを「新・湯治推進プラン」として整理している。温泉を将来世代に引き継ぐために、温泉地や地方公共団体、環境省等のすべきことがまとめられている。

①「新・湯治」とは

「温泉地訪問者が、温泉入浴に加えて、周辺の自然、歴史・文化、食などを活かした多様なプログラムを楽しみ、地域の人や他の訪問者とふれあい、心身ともに元気になること」とし、「年代、国籍を問わず楽しめ」、また、「滞在期間を問わないが、より長期の滞在を行うことが効果的」であると定義している。

本来の「湯治」という言葉は、特定の病気治癒のための入浴プログラムという意味合いが大きく、比較的高齢者が行うものとの印象が強いと考えられるため、より幅広い利用者に、温泉を中心としつつも、周辺環境も含めて「楽しむこと」、「リフレッシュすること」にも主眼を置いた利用の仕方を「新・湯治」として提案したものである。

②「新・湯治推進プラン」

「新・湯治推進プラン」では、「楽しく、元気になるプログラムの提供」、「温泉地の環境づくり」、「『新・湯治』の効果の把握と普及、全国展開」を三本柱とし、これらを進めるための「推進体制の構築や財源の確保」について示している。また、このプランの実践のための先進的取組を進める温泉地として「国民保養温泉地」を挙げている。具体的な内容の一部を紹介する。

■楽しく、元気になるプログラムの提供

温泉地は、温泉地にある地域資源を活用したプログラム、複数の温泉地による連携したプログラムなど、温泉地で過ごす時間が豊かで、かつ心身ともに元気になるためのプログラムを提供する。また、資源を損なわず、質が確保されるようなルールのもとで、可能であればガイドシステムを導入することも重要である。

（取組例）
・自然環境、歴史・文化、食などの地域資源を活かした元気になれるプログラムの提供
・温泉地を拠点とした周辺の国立公園、世界遺産や文化財などを巡る広域周遊ルートを設定
・年代、国籍を問わず、長期滞在しやすい宿泊プランづくり

■温泉地の環境づくり

温泉地の中心となるのは一般的に旅館やホテルであるが、温泉地でにぎわいを創出するためには、地域全体で訪れる人を迎え、温泉地を「人と人をつなぐ場」とすることが重要であり、より積極的に街に人が繰り出し、街全体を楽しんでもらう仕掛けが必要である。

また、温泉、周辺の自然環境、歴史・文化、食などの資源を一体的に評価し、活用することが重要である。これらの資源は、温泉地にとっての生命線であるとの認識に立ち、温泉地自らが資源の状況を随時把握し、保全・活用を図る意識を持つ必要がある。特に温泉あってこその温泉地であり、源泉の保全と持続的活用の重要性については、温泉地全体で認識を共有し取り組むべきである。

（取組例）

・自然、歴史などの地域の資源の状況を把握し、活用のルール化等により持続的な利用を図る

・温泉資源の適切なモニタリングを継続することにより、資源の状況を把握し、利用量の調整を行うなど、温泉資源の持続的な利用を図る

・温泉熱のカスケード利用など、再生可能エネルギーとしての温泉資源の有効活用を図る

■「新・湯治」の効果の把握と普及、全国展開

温泉の効能のみならず、温泉地全体での療養効果等を科学的に把握し、その結果を全国的な視点に立って情報発信することが重要である。

（取組例）

・環境省が調査フォーマットを提示するなどにより、全国の温泉地と温泉療法医等が連携してデータを蓄積・評価・公開する仕組みづくり

・データに基づいた、より効果的な健康増進等のプログラム提供

■推進体制の構築

地域を俯瞰的に眺めて計画を実現していくための体制や財源が必要である。また、温泉地自体の高齢化や過疎化に対応するとともに、温泉地に、過疎化が進む地域の拠点（周辺の住民がつながる場所）としての機能を持たせるといった視点も重要である。

政府においても、環境省が温泉に関連する省庁との連携を進め、温泉地を支援することが重要である。

（取組例）

・地元金融機関等と協力した地域会社の設立、既存の観光関連組織の活用等により、地域全体で課題解決をする仕組みづくり

・地域外の民間企業等との連携

・旅館従業員や地域住民向けの健康増進プログラムの実施や地域のつながりを強化するための取組等による、働く場、居住の場としての環境改善

・温泉地で活用可能な補助制度に関する情報の収集・提供

■国民保養温泉地における取組

国民保養温泉地は、湯量も豊富で自然も豊かであり、また、過度な歓楽街化がされていない温泉地であり、「新・湯治推進プラン」の中核的な役割を担うことができる。先進的に取り組む国民保養温泉地については、地域全体で課題解決に向けて取り組む仕組みづくりも含め、環境省が支援していくことも必要である。

2. 環境省の取組

環境省では、1. で紹介した提言の実現に向けた取組を進めることとしている。環境省の主な役割としては、全国的な観点での温泉地の盛り上げ、そのためにも、温泉地で滞在することによる療養やリフレッシュ等の効果を把握するためのデータ収集の仕組みを構築することが考えられる。

そのほかにも、環境省の所管である国立公園や温暖化対策の施策と連動した取組も検討する。

今年度末を目途に、環境省の取組をまとめたロードマップを作成する予定としているが、現時点で想定している内容を紹介する。

(1)「新・湯治」の考え方の普及、賛同者の募集

提言でまとめられた「新・湯治」の考え方を普及するとともに、温泉地側での受け入れ体制を整えることで、より多くの人に温泉に関心を持ってもらい、温泉地を訪れてもらうことが重要である。

このため、提言の考え方に賛同して、何らかの取組をする意思のある自治体や温泉地、民間団体等のゆるやかなネットワークを形成することを考えている。また、それぞれの団体に、取り組もうとする内容の表明とともに「『新・湯治』推進宣言（仮）」をしていただき、旅行者向けの PR につなげていくことも一案ではないかと思う。

(2)「新・湯治」の効果を全国で把握するための事業の展開

温泉には様々な泉質があり、温泉ごとに違った効能がある。一方で、一般的に温泉地共通の効能として、「温泉に入ったら、また、温泉地で過ごしたら、リフレッシュする、ストレス解消になる」と言われる。泉質ごとの効能については、それぞれの温泉地等において一定程度の研究が行われているが、温泉地で過ごすことの効果についてのデータはあまり集まっていない。

近年は、精神障害による労災認定件数が増加し（これによりストレスチェックが義務化）、また、ワークライフバランスが重視されており、生活の中での上手なストレス軽減や息抜き方法を提供することが求められている。

このため、提言においては、「新・湯治」として温泉地で過ごすことによるリフレッシュやストレス軽減効果を科学的に把握することが重要とされた。

効果の把握においては、全国の温泉地で統一的なフォーマットを使うことで、一つ一つの温泉地でのデータ量は少なくとも、全国合わせれば十分なデータ量となることを目指し、環境省により、統一フォーマットを提示し、データ蓄積・評価・公開する仕組みを構築したいと考えている。来年度には試行的にデータ収集を開始できることを目標に、今年度はフォーマット作成のための検討を行うこととしている。

(3) 温泉熱有効活用のためのガイドライン等の作成

環境省では温暖化対策にも取り組んでおり、温泉熱の有効活用を進めている。温泉熱を有効活用することにより、温暖化対策のみならず、燃料代等の節約にもつながり、旅館等の経営安定にもつながる。

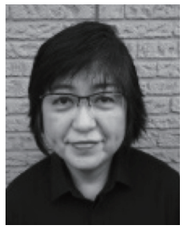
現状においても、エネルギー対策特別会計における補助事業があるものの、十分活用されているとは言いがたい。このため、先進事例やうまくいかなかった事例を整理し、より活用を推進するために必要なことをまとめた「温泉熱有効活用のためのガイドライン（仮）」を来年度までに作成し、配布することとしている。

(4) 国立公園満喫プロジェクトと連携した取組の検討

環境省は、国立公園の「ナショナルパーク」としてのブランド化を目指して訪日外国人を惹きつける取組を計画的、集中的に実施する国立公園満喫プロジェクトを実施している。国立公園内や周辺には多くの温泉地があり、重要な利用拠点となっているため、連携した取組を進めたい。

3. おわりに

7 月 31 日に提言『「新・湯治　ーONSEN stay」の推進』をいただき、公表して以降、少しずつ反響があり、問合せをいただくことも増えてきた。これから多くの関係者の方々と連携して、着実な実施に努めたい。



大森寛子

おおもり　ひろこ

熊本県菊池市健康推進課
総務審議員

菊池市役所健康福祉部健康推進課　総務審議員。
現課 5 年目
国民健康保険、後期高齢者医療保険、国民年金業務総括
高騰する医療費への抑制対策や疾病予防について地域の資源をいかした保健事業を実施

■菊池温泉の概要

旧名隈府温泉、昭和 20 年代末に開湯した比較的新しい温泉で湧出量は、自噴が 246L ／分、動力、14,807L ／分、総湧出量は 15,053L/ 分で、菊池温泉を含む温泉群は大変優勢な資源で泉質は、アルカリ性の単純温泉で、一部単純硫黄泉も存在します。成分含量が塩分として 0.5g/kg 以下、陽イオンの主要成分はナトリウムイオン（Na）、陰イオンの主要成分は炭酸水素イオンと炭酸イオン（HCO3+CO3）であります。

最近の菊池市街地の主な利用施設（温泉旅館８軒、日帰り施設１箇所、足湯３箇所）の温泉資源調査によれば、収容定員一名当たりの温泉量は、4.4L ／分で、我が国の温泉の平均値 1.9L/ 分の 2 倍以上に達し、我が国で最も湧出量の多い別府温泉にも勝るとも劣らない大変豊富な温泉資源として特徴づけられています。

■事業の目的及び概要

平成 13 年度より温水プールや温泉を活用した健康づくりを行政主導で開始し、事業効果の検証結果を市民に周知しながら事業の推進を図ってきました。また同時に健康づくりを支援する補助金要綱の作成を行いグループや団体の組織を育成し、自助による市民主体の活動へ移行してきたところです。

平成 28 年 3 月には、地方創生加速化交付金事業の採択を受け「予防医学」と「長期滞在型観光」の振興も視野に入れながら市内外にも菊池温泉の良さを知ってもらうことや温泉を活用した運動及び食事等の指導による事業効果を測定し、健康・医療関係産業と観光・農業等の連携による健康長寿なまちづくりを目指し「健康づくりプログラムの実施、効果検証を行う事業」を実施しました。

■実施会場の概要

今回実施した望月旅館の温泉は、約 80 メーター離れた源泉からポンプで引湯していますが、湯量は 373L/ 分と豊富であり温度は 48.2℃で浴槽は一部加水し、40℃前後に温度調整されています。

泉質は単純硫黄泉で pH 値 9.4 で肌触りがよく、美肌の湯として知られますが、湯中運動にも適したくせのない優しい温泉です。

■参加対象と募集方法

参加対象：次の①～⑤すべてに該当される方

①菊池市在住で 40 ～ 74 歳の方
②医師に運動・入浴を禁じられていない方
③３ヵ月間の教室受講が可能な方
④健診の結果を改善したい方・腰痛、膝の痛みが気になる方
⑤教室実施前後に実施する採血検査、体力測定等にご協力いただける方
受講料：無 料
定　　員：　30 名
募集方法：菊池市の広報誌・ホームページ
健診結果通知と一緒に同封した郵送案内

■実施プログラム
○期間
1. 教室開始前の血液・体力測定等検査等　30 項目
平成 28 年８月 22 日～ 24 日　菊池広域保健センター（菊池養生園）にて受付。
2. 講座実施：平成 28 年９月７日（水）～ 11 月 30 日（水）12 回実施
3. 教室参加後の血液・体力測定等検査等　30 項目
平成 28 年 11 月 15 日～ 16 日菊池広域保健センター（菊池養生園）にて受付。

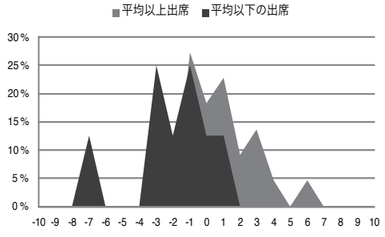
■主な内容
○講義
温泉講話「正しい入浴方法と温泉の効能について」運動講話「正しい姿勢で効果的なウォーキングを！」
「姿勢を見つめ痩せる体をつくる」
「腰痛症とその予防法の方法とは？」
「運動の効果について」
○グループワーク「ウォークラリーのマップ作製・発表」
○昼食メニューの紹介
全 12 回の教室では、菊池養生園とくまもと健康支援研究所が共同でメニュー作成を行い「熊本の食材を使った 600kcal メニュー」を３回提供。それ以外の回は、望月旅館の料理長が作成したメニューを提供。

■企画・評価委員会
事業の企画並びに評価を、温泉と健康を巡る様々な問題解決にむけた調査研究を 30 年以上継続し幅広いネットワークを有する「特定非営利法人健康と温泉フォーラム」に委託しました。
菊池市温泉活用健康づくり企画・評価委員会を構成し３回の会議を開催しました。委員として、温泉療法や自然療法の医師、温泉や運動を組み合わせた疾病予防プログラムの実践指導者、ならびに健康づくりのための温泉の社会的活用システム運用の各専門家にお願いすることにより実証検証の入り口から出口までを一体化し、わかりやすく評価検証ができるよう整理しました。結果、客観的な評価として成果が有効な知見結果とみとめられ、平成 29 年の第 82 回日本温泉気候物理医学会､学術集会（北海道）で発表することができました。

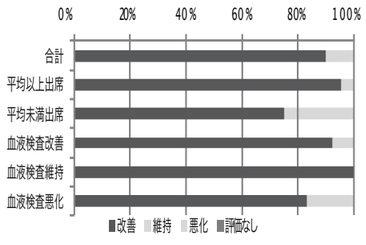
■評　　価
○個別評価
血圧の低下、CAVI（動脈硬化検査）の改善により、循環器系に効果がある可能性がみられた。
関節等の痛みに効果、ストレスを軽減する効果がみられた。
○問診結果の前後評価
膝の痛み、不眠への改善がみられ湯中運動を中心とした本事業効果が大きく表れた。
○生活習慣病の行動変容（運動評価・野菜摂取評価）
自宅での継続的な行動変容や本人を取り巻く環境への効果までは事業期間の ３ヶ月では十分な結果が認められなかった。
○体力測定評価と出席状況及び血液検査の結果
平均以上出席者は改善率 82 パーセントに対して、平均以下出席者では改善率 63 パーセントとなっており「週 1 回の湯中運動（平均以上）」には健康効果が期待できる。

■今後の課題
実証結果により医療費削減効果の試算や過去の保健事業結果との比較等を実施しましたが、治験者の選定方法や定員数、期間、時間や予算の限界があり有用データーに解析値の不透明があったことや医療費削減に貢献できる実証研究としての成果の見せ方など多くの課題がでましたが、継続してできる市民主体の健康づくりプログラムを考え「平成の養生」を目ざし温泉を活用した市民の健康づくりを進めたいと考えています。

血液検査判定と出席状況



TUG 評価



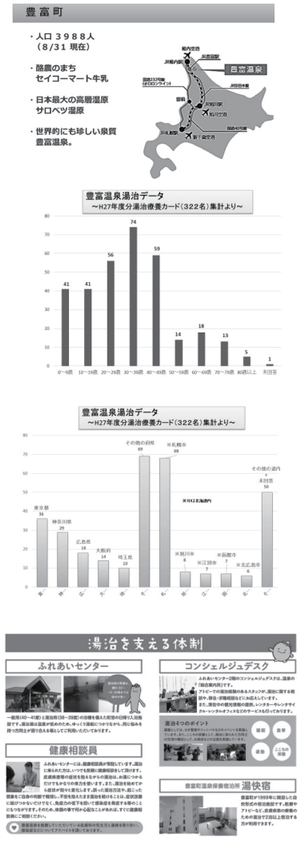
「地域とともにいきる温泉ー健康づくり､ひとづくり､まちづくり」

斉藤 真由美

さいとう　まゆみ

北海道　豊富町
町営温泉施設ふれあいセンター
保健師

北海道立衛生学院保健師科卒業後、豊富町役場にて保健師として１５年勤務し退職。
ふれあいセンター来館者への健康相談窓口を開設するに当たり２００６年４月より従事。
全国各地から湯治へ来る方々及び近隣に住み日頃お湯をご利用される方への健康相談にあたる。



我がふるさと豊富町は、北海道の最北に位置した小さな町です。

昨年開湯９０周年を迎えましたが、道外の歴史ある温泉に比べるとまだまだひよっこです。
おぎゃーと生れた時から石油成分濃厚な温泉として親しまれ、今は全国から尋常性乾癬やアトピー性皮膚炎などの皮膚疾患のお客様が数多く来湯されています。

ベビーバスをご利用の小さいお子さんも湯治に見えられますが、40 代までの若い世代の方々が多いのも大きな特徴です。

皮膚疾患のお客様が安心して滞在できる環境づくりとして、２００６年に健康相談室、２００９年には湯治と観光部門の総合案内所コンシェルジュデスクが、町営日帰り温泉施設「ふれあいセンター」内に設置されました。

コンシェルジュや健康相談員、町営湯治専用宿泊施設「湯快宿」管理人、農産物加工体験交流施設「湯の杜ぽっけ」のスタッフ等、温泉の各施設で働く多くの人が移住した皮膚疾患湯治経験者です。
地元に就職した頃の私にとって、官公署のある中心地から６キロほど離れた温泉はやや遠い存在でした。そして今から１０年ほど前に健康相談員として温泉で働き始めてからも、温泉と町との距離を感じていました。日頃温泉を利用されない町民も同じ感覚だったのではないかと思います。皮膚疾患に良い温泉という知名度もここまで広まっていなかったように思いますし、温泉内ではこれまでの観光客主体の温泉地として存在したい気持ちの方が強かったように感じます。

でも、全国から訪れる若者たちの中から、豊富で人生の再スタートを切りたい、自身の力を発揮したいという方が現れ、これまでの豊富では経験したことのない外部からの刺激が数多く届くようになりました。そんな力を借りてふれあいセンターでヨガ講座を開始し、日頃は運動ができない皮膚疾患のお客様の体力づくりが図られるようになりました。更に勢いを増し市街地で町民向け講座にも関わるようになり、湯治さん向けの運動体験が町民の健康づくりに発展、温泉に足を運ぶ回数が増えた町民も現れています。
時を同じくして温泉内でも新たなチャレンジを試みる宿の後継者たちが活動を始め、独自のお土産品を開発し湯治滞在者の短期雇用先となりました。また音楽イベントを立ち上げ「温泉」「湯治」以外でも町民を温泉に引き寄せています。

そして、じわじわと運動体験の輪が広がってきたこともきっかけとなり、町の健康づくりの課題整理が行われました。

縦割りで行っていたものを、「横の連携」を取りながらそれぞれが分担した形で展開。更には子供の体力向上に向けた講座も開始されました。また、とよとみスポーツＣＬＵＢの大きな特徴として、町民だけでなく湯治滞在中の方も参加可能という点があげられます。

集いと交流が主体の介護予防事業も内容の見直しが図られ、３つの教室が始まりました。

高齢者だけでなく、若い世代、未就学の親子さんも時折参加され、異世代交流の場にもなっています。

新たな取り組みとして、皮膚疾患で湯治を希望されるお子さんへの通学支援策も始まりました。
湯治移住者の転入は得られている豊富町ですが、じわじわと人口減少は進んでいます。そして少子化に伴う学校存続問題は豊富に限らず地方の課題となっています。

湯治で痒みや痛みが緩和されても、帰宅後症状が現れてくることも少なくない為、できることならば豊富で学校生活を‥という声も受け、今年の春より制度が始まりました。町内の民間業者による湯治留学生下宿もスタートしています。

古くから近隣の皆さんに愛されてきた温泉は観光客主体の時代を経て、全国から中長期滞在で訪れる皮膚疾患を抱えたお客様の一助の場と変化しています。更に期間移住者や転入者の新しい風が町民の心をくすぐり、町民そのものの活力向上にもつながっていると思えます。
そうなるには、よそ者を受け入れる側の寛容さと仕掛ける側の想いと楽しむ姿勢が、町全体の活気に不可欠なのではないかと感じています。
この夏より豊富町ふれあいセンターは温泉利用型健康増進施設（連携型）として始動し、既に制度利用での来湯者も多数来られています。
もちろんバラ色なことばかりではなく、発展と共に新たな課題も生まれ、足が止まることも多々あります。ですが横のつながりが一人また一人と広がっていく中で、これまで以上に様々な知恵や力が支えとなってくれるでしょう。時間は少々かかっても、地に足付けて語り合い、しっかり手を取り合って地域と共に生きる温泉としてあり続けてほしいと願っています。

湯治留学支援制度

～アトピー等の皮膚疾患を持つ町外の小中学生、高校生が湯治しながら町内の学校へ通学できるための支援～

＊今後豊富町に移住し、通学することを検討したい方が対象。
・2週間から30日間の事前滞在の経費の一部補助。
・実際移住して3年間を限度に温泉入浴料の免除等。

＊稚内市北星学園大学でも、独自の学生支援策（授業料の減免）を今年度より開始。

とよとみマチグルミ　介護予防事業

・集いの場・・・おひさまサロン
・学びの教室・・いきいきサークル
・運動教室・・・元気体操スクール

おひさまサロン（週1回 90分間でスタート）

気軽に参加、外出、出かけられる場づくり
町直営で２年間（H27、H28）平均参加者23名/回
→H29年、町内で発足したNPOが運営開始
・住民主体の通いの場・誰でもできる居場所づくり

地域連携フォーラム　「地域とともにいきる温泉ー健康づくり、ひとづくり、まちづくり」

地域とともにいきる温泉

「温泉を活用した健康づくり･ひとづくり　竹田市総合インストラクター養成の取り組みについて」

坂本信江
さかもと　のぶえ
大分県竹田市
保険健康課　参事

昭和５７年、竹田市役所入所。以来保健師として、母子保健・健康増進・介護予防事業に従事。平成２１年度から温泉を活用した健康づくり教室等実施。平成２７年度に国のモデル事業、宿泊型新保健指導試行事業を商工観光課等と連携して実施。平成２９年４月より現職。

１．竹田市の概況

大分県竹田市は熊本県、宮崎県に接する大分県西部に位置する中山間の都市である。北には阿蘇くじゅう国立公園を代表する九州本土最高峰「中岳」(1,792m）を主峰とするくじゅう連山、山々の裾野に広がる久住高原、南には本年 6 月にユネスコエコパークに指定をされた日本百名山「祖母山」、瀧廉太郎作曲「荒城の月」のモチーフとなった「国指定史跡　岡城跡」をはじめとする城下町、世界屈指の高濃度炭酸泉が湧出する「長湯温泉」と豊かな自然、歴史文化薫る名水名湯を有する場所である。

平成 27 年 5 月には環境大臣より、今まで指定を受けていた「長湯温泉」に「久住高原温泉郷」と「竹田・荻温泉郷」を加えて「竹田温泉群」として国民保養温泉地に拡大指定を受けた。

本市の人口は 22,603 人（本市住基 6 月末現在）であり、65 歳以上の高齢化率は 44.4%である。本市では平成 29 年 3 月に「第 2 竹田市健康づくり計画(平成 29 年度～ 34 年度)」を策定し、さまざまな健康づくりの取り組みを実施している。平成 27 年度の国保医療費疾病別の内訳では、医療費の約 4 割は生活習慣病となっており、死亡原因のトップは悪性新生物となっている。(別表 1)

①竹田市の概況

その中で大分県下での生活習慣病の内訳を比較してみると平成 26 ～ 28 年の各疾病別有病率順位（対象被保険者 40 ～ 74 歳）では、特に、高血圧、高尿酸血症、人工透析の順位（有病率）が高くなっている。

また、平成 26 年度における、介護保険新規認定者の主要疾患割合は、廃用症候群で 49.1%、認知症で 16.1%となっています。廃用症候群の内訳を見ると、関節疾患が 52.7%で、次いで骨折・転倒等となっている。市民アンケートから「定期的な運動」を実施している割合は、35.3% と低く、『運動の際、運動内容や運動量について指導を受けたと回答した人』は､8 割以上の人が『受けていない』と回答している。また、運動時に安全に歩ける歩道や施設があるかどうかの問いでは、３割の方がないと回答している。これは、大分県の市町村と比較すると県下ワースト３位である。

このような現状から、市民が気軽に運動ができる環境整備（人的・施設等）が必要であることがわかった。そこで、豊かな温泉資源をはじめとする地域資源を活用した健康づくりのための環境整備を推進して、運動の習慣化と生活化に取り組むこととした。

また、商工観光課サイドでは、ヘルスツーリズムの施策として、中長期滞在を促す「温泉療養保健制度」を活用した医科学的見地に立った「竹田式湯治」の組立を行い、観光コンテンツの磨き上げ、地域ブランディングの確立を行っていた。

「竹田式湯治」のコンセプトは、“竹田市の個性的な泉質による温浴”、“豊かな自然・歴史文化を感じながらウォーキング”、“地産地消、朝採り野菜などの新鮮かつ安全な食”、“地域の人々との対話の中から生まれる笑い”の黄金の法則を掛け合わせながら、人間自らが持つ自然免疫力を高めようとする一連の行動を推進するものである。

平成２７年度には、厚生労働省の「宿泊型新保健指導試行事業」のモデルとして採択され、関係機関と連携して取り組んできた。これまで健康づくり事業の一環として、合併以前から「長湯温泉」での研究や湯中教室等に取り組んできたが､観光サイドの「楽しさ」「ワクワク感」の要素を取り入れ、継続的に自分

②（別表 1)

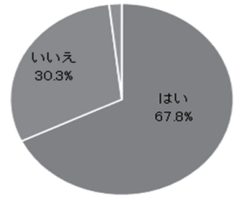
〈主要死因　人口 10 万対〉

	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
第1位	悪性新生物	肺炎	悪性新生物	悪性新生物
第2位	心疾患	悪性新生物	肺炎	肺炎
第3位	肺炎	心疾患	心疾患	心疾患
第4位	脳血管疾患	脳血管疾患	脳血管疾患	脳血管疾患

資料厚生労働省「人口動態統計」

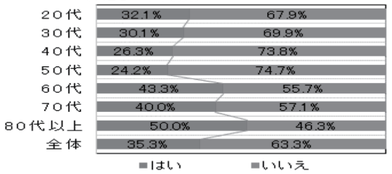
③市民アンケート

運動するときに安全に歩ける歩道や施設が身近にある（H28年）



④市民アンケート

定期的に運動していますか
（H28・年代別）



⑥養成講座風景

⑦養成講座風景

⑧活動風景

⑨活動風景

のカラダを見つめる意識付けを感じた。

さらに安全かつ専門的な見地に基づく指導・サービスが提供できる人材の確保、育成の必要性を痛感した。

このような竹田市独自の取り組みとその方向性が評価され、平成２７年度に国の地方創生先行型先駆型上乗せ交付金タイプⅠとして『世界に冠たる日本の温泉資源活用による「国民の健康づくり」と「予防医療の推進」「新たな観光戦略」事業』が採択された。

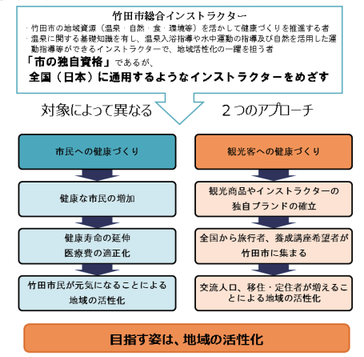
そこで、温泉利用型健康増進施設をはじめ、竹田市がさまざまな場で健康づくりと温泉療養、湯中運動などに精通した「ひとづくり」の必要性を感じ、市民や人材観光客、保養客に対しておもてなしの心を持って、よりそい伴走する「竹田市総合インストラクター」を養成することとした。

2. 竹田市総合インストラクター及び人材育成事業の方向性

本事業は､竹田市独自の地域資源（温泉､自然､食、環境等）を活用して健康づくりプログラムを提供する技術を持つ人材を育成することで、市民及び竹田への来訪者の健康づくりに寄与することを目的としている。

3. 竹田市総合インストラクター養成の全体像 «竹田市総合インストラクターとして「めざす姿」»

⑤竹田市のインストラクターのめざす姿



4. 竹田市総合インストラクター養成講座の実際

竹田市総合インストラクター養成内容
・８人の講師からの講義と実技を実施。
平成２８年度は１０月から２月で２９講座実施。概ね８割の出席で修了とする。

平成２８年度（第１期生）
期間：平成 28 年 10 月 21 日～平成 29 年 2 月 28 日
受講生：20 名（男性：６名、女性：14 名）
平均年齢：58 歳、皆勤者：２名
その他育成：温泉利用指導者２名
／温泉入浴指導員：52 名

5．竹田市総合インストラクターの活動

・平成 29 年２月：竹田市総合インストラクター協会設置
・平成 29 年４月：健康運動教室の補助開始
・平成 29 年７月：フォロー研修会および健康づくり教室実施
・平成 29 年 8 月：竹田市総合インストラクター協会設立総会

6．今後の課題と展望

現在、竹田市では約 40 の健康づくり組織が存在し、その中に運動推進する組織があり、その他起業グループが活動している。

今回、総合インストラクターの養成を行い、各組織･団体の特性および役割を明確化することの必要性を感じた。それぞれの組織の位置づけを行い、「地域の社会資源～温泉･人･自然環境」を有効に活用できるシステムを構築していく。

そのために、地域づくり、まちづくり、健康づくりをすすめる人材の発掘と育成、地域で活動しやすい環境や体制の整備を行う。また、新規に認定された温泉利用型健康増進施設での健康づくり事業を推進する。

今後、さらに関係機関（観光･企画・生涯学習・農政等）と連携して、市内外の方の健康づくりに取り組み、地域の活性化につなげていきたい。

«課題»
（１）組織･団体の役割の明確化
（２）組織活動の特性に合わせた活動の場の提供
（３）市民への周知（普及啓発)、情報発信

«今後の取り組み»
（１）組織間交流や情報共有の場の提供
（２）運動を継続するためのしくみづくりや体制整備
（３）受講生の確保やスキルアップ
（４）組織･団体の育成や支援
（５）関係機関等との連携の充実と強化

＊本年 7 月 27 日、本市の長湯温泉療養文化館「御前湯」と竹田市Ｂ＆Ｇ直入海洋スポーツセンター体育館が一定の要件が満たされれば所得税の医療費控除を受けることができる「温泉利用型健康増進施設」（連携型）に厚生労働大臣から認可された。

温泉とともにいきる地域、地域とともにいきる温泉を目指して

坂本 誠

さかもと　まこと

NPO法人ローカル・グランドデザイン理事
公益財団法人　地方自治総合研究所　客員研究員

1975 年高知県生まれ。農山漁村地域の持続発展策、市町村合併・地域運営組織など地方自治に関する研究を行う。(財）とっとり政策総合研究センター、(独）農研機構農村工学研究所、全国町村会を経て 2015 年より現職。博士（農学)。

著書『地域は消えない (編著)』『「分かち合い」社会の構想 (編著)』

1．「つなぐ場」としての温泉

温泉は、さまざまな関係性を紡ぎ出す「つなぐ場」だった――と、私は考えています。

第１に、温泉は人と人を「つなぐ場」でした。乱暴な言い方かもしれませんが、温泉に成分やそれによる効能だけを求めるのであれば、温泉水を提供するだけでも同様の効果を与えられるでしょう。しかし、それだけでなく、温泉につどう湯治客どうしや地元住民との交流が、湯治客を元気にする要素もあるのではないでしょうか。だから“温泉地”あるいは“温泉街”という場(空間）が育まれてきたのではないでしょうか。

第２に、温泉は地域と地域を「つなぐ場」でした。温泉 “街” は、周辺の農村（むら）から村びとがつどう「まち」でもありました。“街” では、物資だけでなくさまざまな情報が交換され、“街” を介して方々に発信され、温泉をとりまく地域を豊かにしてきました。

第３に、そもそも温泉は “ひと” と “自然” を「つなぐ場」でした。なかには野湯を楽しむ人もいますが、湧出する湯を剥き出しの自然のまま利用するには、シチュエーションも対象者も限られます。大地の恵みである温泉に “ひとの手” が加わってはじめて、入浴の対象としての温泉が成立し、現在のような温泉文化が育まれてきたのではないでしょうか。

2．「つなぐ力」を失いつつある温泉

ところが現在、温泉は「つなぐ力」をなくし、「つなぐ場」としての存在を失いつつあるように思えてなりません。

ある時期から、旅館やホテルは「規模の経済」の追求による経済合理性の追求をはかりました。そしてよく言われることですが、飲食や購買、あるいは遊興も含めて旅館やホテルごとに囲い込もうとしました。

事業者ごとの経営が健全でなければ温泉地は成立しませんから、経済合理性の追求は必要です。しかし、行き過ぎた「規模の経済」の追求、それを通じた合理性の追求は、旅館やホテル、そして温泉地の画一化をもたらし、多様性を喪失させました。また、行き過ぎた囲い込みは、事業者ごとの分断のみならず、温泉と地域の分断をもたらし、温泉のもつ「つなぐ力」を低下させました。

文化は多様性の中に育まれるものであり、地域は “つながり” を糧に成長するものです。前述のような温泉における “多様性の喪失” と “つなぐ力” の低下は、これまで温泉が育んできた文化や、温泉を通じて発展してきた地域をも衰退に追いやろうとしています。

3．解決の方向性

それでは、「つなぐ場」としての温泉の力を取り戻すためにどうすればよいのでしょうか。以下では、いくつかの提案を試みたいと思います。

第１に、事業者相互、そして温泉をとりまく人びとや地域とのつながりを再構築することです。

具体的には、まず、旅館やホテル単体で「規模の経済」を追求することの限界、囲い込みによる自己利益の最大化を追求することの限界に気づくことが必要です。次に、事業者のみならず、温泉をとりまく人びと（地域住民や常連客）の温泉に対する思いに積極的に耳を傾けること、そのためには、温泉に対して思いを抱く人びとがそれぞれの思いを発露できる場所、ひいては温泉に関われる機会を設けることです。たとえば、観光客だけでなく地域住民も参加できるイベントがあってよいのではないでしょうか。また、共同湯という存在あるいは場の重要性もここから導かれます。いずれにしても、温泉が、地域の経済だけでなく、そこに集う人びとの心を潤し、“つながり” を豊かにしうる存在あるいは場であることを再認識することが重要です。

第２に、温泉を通じた地域複合経営の視点をもつことです。

たとえば地域の雇用についていえば、温泉を含めた観光業は曜日や季節要因などによる繁閑差がつきものであり、事業経営や人事管理のネックとなっていますが、地域の他産業と連携協力することにより、その繁忙期と閑散期の雇用需要の波を少しでも吸収するしくみを検討できないでしょうか。また、食については、地域農業との連携を地域ぐるみで考えることはできないものでしょうか。さらに、エネルギーについて、温泉の熱エネルギーの地域への還元をより積極的に検討できないでしょうか。いずれにしても、地域との “つながり” を大事にして強化することにより解決できることは少なくないと思われます。

そして最終的には、地域とともに生きる温泉、温泉とともに生きる地域を目指すことです。

たとえば、観光だけでなく療養地としての温泉のあり方をもっと追求してもよいでしょう。既に北海道豊富町・豊富温泉、大分県竹田市・長湯温泉で、温泉利用型健康増進施設の認定を受けて、温泉を利用した健康増進に向けた新たな取り組みが始まっています。

また、地域内外の多様な主体が関わるしくみをつくることも大事でしょう。宮城県大崎市鳴子温泉では、旅館も含めて地域ぐるみで地域の農業を支えるしくみづくりが始まっています（鳴子の米プロジェクト)。また、豊富温泉では、「館主と客」「サービス提供者と利用者」という関係を乗り越えて、皆が「温泉に関わる一員」としての当事者意識をもって温泉街の活性化の取り組む動きが始まっています。

温泉が「つなぐ場」としての存在を取り戻し、そこにつどう人びとが心と身体の両面から癒やされ、元気になる場所になること。温泉を通じてさまざまな交流や連携が生まれ、地域の活力の源泉となること。そして先人が紡いできた温泉というかけがえのない文化がさらに紡ぎ育まれることを願ってやみません。

「歴史ある温泉」の再生を考える－温泉発見・開発伝説の活用－

前田 勇

まえだ　いさむ

立教大学名誉教授

立教大学名誉教授，（元）立教大学大学院観光学研究科博士課程主任，博士（社会学）
日本観光研究学会・名誉会員（元会長)，日本温泉地域学会名誉会員

専門分野：観光行動学・観光心理学，観光文化論，温泉文化社会学，サービス理論
主要著書：『観光とサービスの心理学』『サービスの科学』『現代観光総論（編著)』『現代観光とホスピタリティ』(他多数)

はじめに
近未来社会における温泉利用と利用形態

現代は、都市化の進行と自然との接触機会の減少を背景に、社会的・心理的要因によるストレス増加は肉体的・精神的な悪影響は各所で顕在化し、また生活習慣病の増大と蔓延とは大きな社会問題となっている。わが国においては、高齢化・長寿化の進行も加わり、健康に対する関心は、食生活をはじめとする日常生活ならびに余暇活動などの非日常生活場面の両方に向けられるようになってきている。

このような状況における温泉利用は，多くの人びとのニーズに密接に関わるものとして認識され、国民と社会の関心は今まで以上に高まってくると考えられ，これらの分野においてビジネス活動を展開しようとする動きもつとに活発になっている。都市部においては、スポーツジムなどの健康増進施設を設置・経営することは、かなり以前に始まったが、さらに近年には都市部の人びとを主たる対象として、手軽に温泉利用ができる「大規模都市型温泉施設」が相次いで開業するようになっている（＊)。

それらは，自然との接触・地域の歴史などにふれる機会はないものの、現代都市型の利便さと快適さとを前面に打ち出した “現代型温泉” としての特徴をもっている。このようなタイプの新しい温泉施設が、全国各地に存在する “古くからある温泉地” を衰退させるひとつの要因となっていることは否定できないところであろう。

しかし、“現在から近未来の日本” において、期待され・求められる温泉地は大きく変りつつあると考えられる。約半世紀前に日本で観光大衆化が本格的に始まった時期における温泉利用の基本的形態は「成人・男性・団体・日本人・健常者」を対象として、現地での行動は，入浴・宴会・見物と買物から構成されていたと要約することが可能であった。

これに対して、現在から近未来における温泉利用は，「若年者～高齢者のすべての年代・女性・家族および個人と小グループから団体までの多様な形態（外国人に代表される生活習慣の異なる人たちを含む)、また肉体的ハンディのある人」からなる幅広い対象であり、、当然なこととして、旅行先での行動も，散策・街歩きと立寄り、さまざまな体験と学習などが含まれるようになってくる。そして皆が同じように行動するのではなく、自分（たち）の好みにあった行動を選択するようになると予測されている。

このような状況を考えると、温泉地の再活性化を目指すこと、すなわちかっての賑わいや活気を取り戻そうとする場合に、現在、旅行とくに温泉利用の中心となっている人たちに焦点をあてて、人気のある施設づくり・イベント企画を考えることが、これからの時代においても有効であるかはかなり疑問がある。

現在、「好む人が多い」とされているモノやコトを用意し、対応しようとするのは，誰でもが思いつくく安易な方策である。観光事業をはじめ地域の発展を目指す事業における成果は、資源特性・立地条件（大市場との距離)・準備可能な施設等の規模・競争関係などと関係しており，さらに事業資金（投資金額）などの影響も大きい。大規模都市型温泉施設のように，新市場を開拓しようとした事業に典型的にみられるが、成功した先行事例を手がかりに、“二匹目のドジョウ” を求めるような取組みは多くの場合、利便性・快適性ともに先行事例に比べて中途半端に終わることが多く、失敗しやすい。

温泉地は、自然資源である温泉の存在が不可欠であり、温泉の発見・開湯から現在までのかなりの時間が必要であり、温泉地には長い時間をかけて培ってきた歴史が存在することになる。そのため、歴史ある温泉の活性化を考えるにあたっては、発見･開湯時以来の歴史を振り返り、記録・伝承・物語などの中から、今後に活用することが可能な素材を探すことが必要なのである。

（＊；2003 年３～６月にかけて東京都内に「大規模都市型温泉施設」が相次いで営業を開始し、類似施設は大阪をはじめいくつかの地方都市にも広がった）

1．温泉発見・開発伝説 (1)
–数多くの温泉に関わった行基–

温泉のすべてに発見・開発伝説があるわけではないが、多くの人が知っている温泉の多くは江戸時代半ばまでに，すでに温泉利用が始まっている。

神話時代から存在するとされる温泉では、発見・開湯者として「国造り伝説」で知られる大国主命・少彦名命が登場することが多い。また、『日本書紀』に仲哀天皇妃として三韓遠征に関する記述がみられる神功皇后が、帰途利用した九州の温泉が身体を癒して「うれしいのう」と言われたことから、「嬉野温泉」の名が生まれたとされている。

神話時代の発見・開湯伝説からは、温泉が自然界を司る神々の恩恵であるとする思想を伺い知ることができ、また、高位の人物に関する記述からは、温泉の治療に果たす力に関する逸話を知ることができる。

仏教が伝来し、さらに天台・真言密教が本格的に布教に取り組み、関わりの深い山岳信仰の影響も加わって、温泉の発見・開湯者として著名な僧侶が登場してくる。

各地に所在する主要温泉について「発見者・祭られている所・発見に関する逸話等」を整理した研究（＊＊）によると、発見者として最も多く登場するのが７世紀後半から８世紀半ばに活躍した「行基」であり、活動の拠点である近畿以外の東北・新潟・北陸などの温泉の発見者ともされている。

行基は 740（天平 12）年、聖武天皇から大仏建立事業への協力を直接依頼され、これに応じて、勧進（寄付を集めること）責任者となるがその時すでに 72 歳であり、それまではまさに波乱万丈の人生であった。行基は 40 歳頃までは法相宗僧侶として（大阪で）修行するとともに、井戸掘削や構築工事などの実践的な社会事業についての知識と技術を身につけた。その後、「知識結（お互いに力を出し合って協力するしくみ）」と称される僧俗混合集団を結成して近畿を中心に貧民救済・治水・土木などの社会事業に取り組むとともに布教にあたった。行基の活動が盛んになると、その影響を恐れた政権などから非難され弾圧された。しかし、行基が指導する社会事業と布教活動の内容がとくに反政府的なものではないことが次第に理解され、それらを評価した結果が大仏建立への協力依頼となった。数々の実績がある行基の勧進への効果は絶大で、大仏造営事業を成功させることに貢献した。その功に対し朝廷は、日本最初の「大僧正位」を贈っている。

行基が近畿を中心に数十の寺院を開いたことに関する史料は存在する。その他の北は青森から南は宮崎に至までの約 600 もの寺院に「行基が開基した」との伝承はあるが、いずれも「追慕による伝承」と解されている。また行基本来の活動である社会事業に関しては、掘削指導の貯水池３か所，構築指導した橋梁２基，整備指導した港湾５ケ所と記されている。しかし、前にも温泉発見者として最も多く登場するのが行基であると記したが、行基が温泉の発見・開湯に関わったと記されている「史料」は存在していない。行基の発見・開湯伝説は、活動拠点の近畿から遠く離れた地域に多くみられるのがひとつの特徴であるが、７世紀頃から人びとの病をはじめ苦悩全般を除いてくれる如来（仏）である薬師如来と、社会事業の実践者である行基とを重ねて、国民的崇拝の対象となっていたことを意味しているものと考えられている。

（＊＊；樽井由紀「温泉地における薬師堂の管理−松之山温泉の事例」、『温泉地域研究』第 21 号、2013 年９月、日本温泉地域学会。）

2．温泉発見・開発伝説 (2)−円仁と空海−

９世紀に活躍した二人の僧侶も登場する。円仁は天台宗開祖最澄（後の伝教大師）の愛弟子であり、最澄の功績を発展させ、最澄の没後に天台宗座主を務めている。838 年に入唐したが、唐・武王の仏教弾圧政策を影響を受けて苦難した（帰国後、その記録を『入唐求法巡礼行記』として発表している）。円仁は 818 年、最澄（当時 50 歳）の東国巡錫（教えを説くために各地を巡り歩くこと）に随行する（当時23歳）。円仁が最澄の随員として浅虫・恐山（青森）を訪れることは年譜的に可能ではあるが、行基の場合と同様に “崇拝伝承” であろうと解するの妥当である。円仁は逝去２年後に，わが国が唐に倣って導入した大師号（特に功績があった僧侶に天皇が贈る尊称）を、最澄についで贈られている（「慈覚大師」）。

続いて登場するのが真言宗開祖空海（後の弘法大師）である。言うまでもなく、空海が修行した四国各地（八十八か所）の寺院を順に回る巡礼は「遍路」と称されており、江戸時代半ば（17 世紀末）から広がり出して現代まで続くわが国でもっとも歴史のある、本来の “聖地巡礼” である。

空海は 806 年、唐から帰国すると直ちに観世音寺（太宰府）で、翌 807 年京都・高雄の山岳信仰の拠点でもあった神護寺に本拠を移して布教を開始するとともに、桓武帝の次男で 52 代天皇となった嵯峨帝に拝謁し信頼を得る。嵯峨帝は書の名人として知られ、空海・橘逸勢（たちばなのはやなり）とともに（同時代の）三筆」と称された。そして９年後（ 816）に嵯峨帝から高野山一帯の土地を拝領し「金剛峰寺」を建立している。
さらに７年後（ 823）には「東寺」を拝領して真言宗布教の京の拠点としている。
空海が発見・開湯した温泉は全国各地に存在しており、その総数は数十か所に達しているが，史料等の裏づけがあるものはほとんど存在せず、活動年表と照合すると伝聞に過ぎないものがほとんどである。「空海は独鈷を用いて、大同２＜ 807＞年に靈湯を湧出させたと伝えられる」と開湯縁起に記載されている「独鈷の湯（修善寺温泉）」の場合は，空海が訪唐する前（ 798 年）に門弟の杲隣（こうりん）が開基したとある史料があり、寺院である修禅寺は、後に臨済宗（現在は曹洞宗）となるが，当初は真言宗寺院であったことは、寺の裏山から平安期の密教法具が出土したことから認められている。
空海とほぼ同時代に東北地方の平定を命じられ出陣し、794 年に征夷大将軍に任命された山上田村麻呂は，大和王朝の支配地を拡大して帰還する際に、各地に寺院等を建立しており、併せて温泉開発を行ったとされている。この場合は “都の新しい力” によって行われた事柄がすべて、統帥者（山上田村麻呂）の名とともに残ったと考えられる。

3．温泉発見・開発伝説 (3)−空海から弘法大師への道−

空海は 835 年、高野山で入定（逝去）するが、多くの弟子たちが教えを守り真言宗の布教に努めた。その後、東寺をはじめとする関係者の長年にわたる朝廷等への働きかけによって、空海に「弘法大師」の称号が贈られた。それは没後 86 年目の 921 年であり、最澄が没後 44 年に贈られていることと比較しても、空海が第 52 代嵯峨帝の絶大な庇護を受けていたことに対する反発などが影響したとされている。空海に「弘法大師」称号を贈ったのは第 60 代醍醐帝であり、文人菅原道真を右大臣に登用したことで知られるが、道真は間もなく対抗勢力によって太宰府に追いやられ、現地で逝去しているが、醍醐帝は道真の地位を以前に戻して名誉回復を図っており、空海への大師号はそれと前後して贈られたものであった。

この後、空海は弘法大師と称されることになり、その以前とは明らかに異なった存在となっていくが、そこには同時の時代と社会的要因が関係していたと考えられる。
空海には、没後も以前と同様に朝・夕の食事が捧げられ続いていたが、やがて「弘法大師は逝去してはおらず、回国教化を続けておられる」とする「入定信仰」が生まれ、さらに 11 世紀になると人びとと共に巡礼を続けておられる」とする「同行二人」という考え方が生まれてきた。

一方において，９～10 世紀になると、釈迦が没して二千年が経過すると社会の秩序が乱れる「末法の時代」が到来するとされ、当時の暦にあてはめて 1052 年が末法元年とされ，死後の世界に極楽浄土を求めようとする動きが生まれた。全盛を誇った藤原頼道が宇治に「平等院」を造営したのも 1052 年のことであった。

もうひとつ、日本には古くから「神」と「仏」が共存しており、両者ともに信仰対象とするという「神仏習合思想」が受けいれられてきた。そして、平安期には「神の本地（本体）は仏であり、（日本の）人びとを救うために神として現れた」とする「本地垂迹説」が支持されていた。なお、「神仏習合思想」は現在も生活の中に存続しており、願い事をする際に「神様・仏様・○○様」と言うことがみられる。

このような、混迷し、不安に満ちた首魁において、人ひどが頼れる唯一絶対の存在として、弘法大師は多くの人びとから崇敬対象となったと考えることができる。弘法大師は他の著名な僧侶とは異なり、宗派を超えた存在となっており、大師＝弘法大師とする見方は現在においても広く認められている。なお、「遍路」に多くの庶民が参加するようになったのは空海の没後 800 年以上後の江戸時代の元禄期以降のことである。
空海生存中から弘法大師尊号が贈られるまでの約百年、その後 800 年以上にわたって全国各地の人びとに弘法大師の偉大さを伝え、絶対の守護者のそんざいを広め続けたのは「高野聖（こうやひじり）」と称される、高野山を本拠とするものの、全国各地を行脚して布教と勧進にあたった僧侶団であった。高野聖の性格と役割は時代によっても、また活動地域によって同様ではなく、「お札」などを売り歩く宗教商人化した場合もあったとされ、非難の対象となったこともあった。しかし、行基のように社会事業に取り組む者もいたとされ、温泉の開発にも関わりをも場合もあったものと想像され、その場合には、師祖弘法大師の名が用いられたものと考えられている。

4．関金温泉の発見・開湯伝説−活用の基本的方策−

各地の温泉の発見・開湯に関わったとされる人物について、それぞれの業績と当時の社会背景などについて紹介してきた。これらを通して明らかになったのは，全国の主要温泉の発見・開湯に密接な関わりをもっているのは、奈良時代の僧侶で優れた社会事業家であった行基と、平安初期に活躍した真言宗の開祖空海（弘法大師）であったということである。

この二人が関わったとされる温泉は、日本各地に存在しており、それぞれの活動拠点からかなり遠く離れた場所であったり、発見・開湯されたとされる時代と活動年譜とが明らかに整合しない場合も少なくないが、その名が残されているのは、偉大な先賢への追慕によるものであると解されている。空海に関しては「弘法大師発見四十八湯」との呼称も残っており、全国各地に “関わりがあるとされる温泉” が存在している。その中には、『旧約聖書』の “ラクダに水を与えた” というエピソードが、場面と人物とを代えて弘法伝説として、「日本の民話」に収録されている例もある「群馬・川場温泉開湯伝説」）。

行基と空海（弘法大師）が温泉発見・開湯に関して、直接・間接に対象にしたとされている温泉をそれぞれ調べて照合してみると、両者がともに関わったとされている温泉が２か所あることが判明しており、そのひとつが「関金温泉」である。
もうひとつは「芦ノ牧温泉（会津若松市）」で、同温泉も古い歴史があることで知られおり、千数百年の昔、旅をしてきた老僧（＝行基）によって発見されたとの伝承があるとのことだが，行基ではなく空海（弘法大師）が発見したとの異説も残されている。
芦ノ牧温泉は、脚気・眼疾などに効能があるされるが、長い間にわたり道路が未整備で、自動車とくにバスが乗り入れられるようになったのは 1970 年代であり、それまでは近在者の湯治利用が中心となっていた。70～80 年代に各地で興った “独立国ブーム” にいち早く呼応し、「ジパング国」を “設立” して話題となったが、ブームが去るとともに関心も薄れてしまった感がある。近年は、会津若松市の “奥座敷温泉” をアッピールすることに地元は力を入れている。

関金温泉は，その開湯に関して「諸説あるが最も古いもので養老年間（ 717～ 724）といわれており、鶴が入浴しているところを行基が発見し，後に弘法大師が温泉地として整備した」と資料に記載されている。したがって養老最初の年から数えると，2017 年が開湯 1300 年にあたることになる。717 年を（前記した）行基の活動年譜からみると、社会事業活動等が糾弾され弾圧を受けた年にあたるが、温泉発見を史実とみるか否かは別な問題であろう。また、弘法大師が温泉地として整備したことについては曖昧そのものであり、伝聞に他ならない。なお、開湯伝説にはさまざまなものがあり、延略年説（ 782～ 806）、貞観年説（ 870）、元弘年説（1331）などがあるとされるが、発見・開湯年が後年になるほど、行基・空海の実在時代から離れていき、次第に、偉大な先人の名を用いたものとなっていったと言うことができる。

重要なのは、発見・開湯が何時のことかを史実としてを明らかにすることではない。

このような発見・開湯伝説がどのようにして作られたのか、伝説にはどのようなモノやコトが関わったのか、などについて調べ、その結果を再活性化案に生かすことが可能かについて検討してみることである。

関金温泉については，わが国有数のラドン放射能という資源を有し、「日本の名湯百選 ©」の一つにも選定されている温泉の再活性化を如何に図るか、という温泉に焦点をあてて検討するのか、それともより広範囲に自治体（倉吉市）全般の活性化を検討するための “ひとつの要素” として扱うのか、という問題がある。そのいずれが適当かは一概に論じ難いが、本稿では前者（関金温泉再活性化案）に関して、若干の所見を述べることとしたい。

関金温泉への興味・関心を改めて高めるために、また関金温泉を含む地域全体について考えるにあたっては、日本の古代から中世への移行する時代に大活躍した二人のビックネームが、なぜ登場してくるのかについて、想像し、考えてみることが大切である。

背景となっている時代に、京の都を中心とする近畿から因幡はかなりの遠隔地であるが，人と物資の移動は行われ、それに伴って「情報」も行き交っていたと考えられる。

だからこそ，さまさまな技術・知識も広がっていったのであり、“偉大な先人の名” も遠くまで伝わっていたのであ る。

（現在の鳥取地方と）山陽道との間には、当時は、伯耆から岡山北東部を結ぶ「作州街道」と因幡（県東部）から智頭／若桜を経て播磨（現･兵庫）に入る「印旛街道」とが存在しており、両地方の経済・文化交流に寄与していたと考えられている。文化庁はこの２つの街道について、前者を「大山道」、後者を「智頭往来–志戸坂峠越」と命名して、「歴史の道百選」に選定している。この内の後者については，智頭急行・若桜鉄道などの沿線ローカル線人気から地域を訪れる観光客も増加しているとされている。

また、前者（作州街道）についてはすでに、さまざまな健康増進プログラムが考案・実施されているが，都と伯耆国とを結んでいた街道の関所の地に位置していた関金温泉を、山陰と山陽との生活文化をはじめとした，さまざまな交流チャンネルとして、復活させる方策に関しては、郷土史家をはじめ地域文化人、地域の食生活や習慣に知識や経験のある人たち、そして “自分たちの楽しい旅” についてのさまざまな人たちの提案や意見を伺うことを通して、地域が集積している英知を、近未来に生かすアイディアを生み出してほしいものである。

むすび–温泉利用に関する “武蔵の国の逸話”–

今夏の高校野球大会（2017 年）優勝校の花咲徳栄高校がある加須市（元・埼玉県北埼玉郡騎西町）に玉敷神社という古社がある。同神社は明治以前は久伊豆明神とも称されており，現宮司が執筆した資料によると、1716～36（江戸・享保期）に神職を務めた河野長門守盛吉が記した『要用集』の中に、50 年余り以前の 1661～73 年（寛文年間）の出来事として、境内にある木の根元に水が溜まるようになり、やがてその水が「薬水」であるとの評判が広がり、近辺以外に遠方から訪れる人も増え、竹筒でその水を持ち帰る人もいたとされる。まもなく神社から営業許可を得た業者が、境内に入浴施設を設け、“薬水” を沸かして「明神湯」の名をつけた浴場をつくり、さらに飲食施設を整えた。

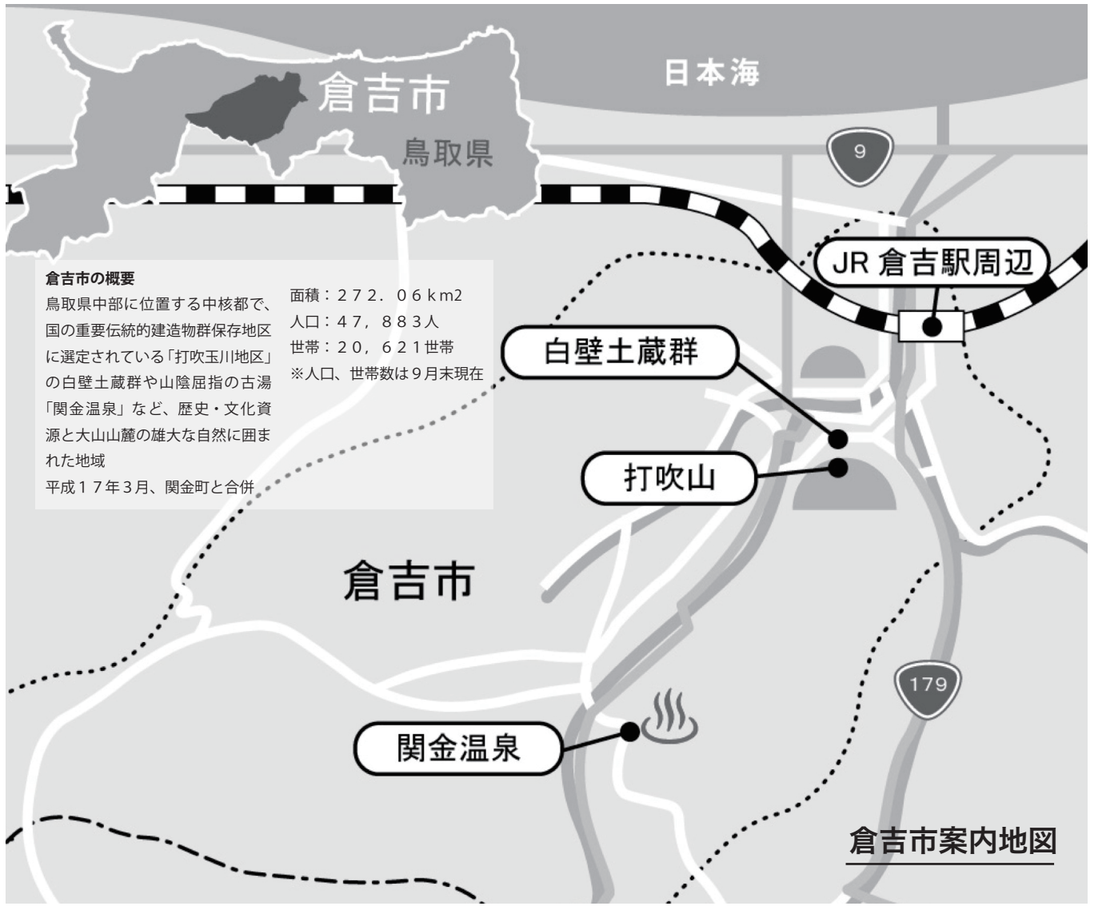
このような経緯で成立した明神湯は，農繁期の疲れを癒す農民、持病の治療を目的として訪れる湯治客などによって連日賑わい、現宮司は「このような状態は、戦後もしばらく続き、あたかもヘルスセンターのような観を呈した」と少年時代の記憶を語っている。明神湯は 1977（昭和 52）年閉じられたが、神社に隣接した料亭（名称「玉敷」）が飲食施設として存続している。

この逸話は、人びとの “薬水信仰” を背景としているが、利用された湯が「温泉」に該当するか否かは定かでない。しかし、現在みられる都市型温浴休養施設の原形がすでに江戸時代中期に存在していたことを示していることは確かである。

温泉に関して、利用増大を含めて新たな方策を考える際に必要なことは、まず過去について学び直すことであり、「温故知新」の考えを大切にすることであろう。

健康と温泉フォーラム2017 in倉吉市

地域とともにいきる温泉ー
健康づくり、ひとづくり、まちづくり



編集･発行　特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム
〒151－0066　東京都渋谷区西原１－５０－２
☎・FAX　03-6804-8575
E-mail info@onsen-forum.jp　http//www.onsen-forum.jp
制作　ryoondo-tea　涼音堂茶舗
E-mail info@ryoondo-tea.jp　http//www.ryoondo-tea.jp

©The Forum on Thermalism in Japan　printed in Japan 700

表紙の絵 ＜東大山夕照＞ 1996 年
グリーンスコーレせきがね所蔵

加納 告保　(1928-1997)

かのう　つぐやす　兵庫県神戸市に生まれ、幼少時に倉吉に転居。戦後復活した「砂丘社」の文化運動に啓発され教職のかたわら創作活動をすすめた。長谷川富三郎や棟方志功などの影響を受け、日本板画院展へ出品するようになる。1976 年第 26 回モダンアート展版画部門賞受賞、第 10 回現代美術展に出品。小中学校の美術教育においても教材開発などで実績を残した。